事前学習会・新宿区長表敬訪問

佐藤奏

第 1 回学習会　令和元年 7 月 10 日（水）新宿コズミックセンター指導員室　17 時～20 時

・主催者あいさつ　諏訪 丹美（新宿未来創造財団　管理担当事務局次長）
・随行職員・参加者自己紹介
・青少年交流概要説明　岸田　心（新宿未来創造財団　地域交流課長）
・旅行説明　長谷川　直行（旅行取扱業者　株式会社　旅工房　国際旅行行事部）
・写真撮影（休憩）
・講義「ベルリン市ミッテ区ってどんなところ？」加藤　玲奈　（新宿未来創造財団　地域交流課）
・派遣者ミーティング

遂に始まったドイツ事前学習会。初めて派遣メンバーと顔を合わせ、自己紹介やプログラムの説明、ドイツの紹介など、情報量がとても多くとにかく緊張しました。プログラムへの期待が高まり、この時からドイツ派遣が楽しみで仕方がありませんでした。

学習会後にはドイツ派遣最終日に行うさよならパーティーの出し物会議も始まり、初対面ながらも積極的に意見を出し合うことができ、充実した第一回目の学習会となりました。

第 2 回学習会　令和元年 7 月 17 日（水）新宿コズミックセンター指導員室　17 時～20 時

・講義「新宿区における多文化共生施策」神崎　章（新宿区地域振興部　多文化共生推進課長）
・講義「新宿区におけるスポーツ振興」岸田　心（新宿未来創造財団　地域交流課長）
・前回（2017 年度）派遣青少年との交流
・講義に関するディスカッション
・派遣者ミーティング

2 回目の学習会はスポーツと文化を切り口に、新宿区について勉強をしました。

その後、前回派遣青少年の 4 人と交流して、実際の体験や経験をもとに様々な質問に答えてもらいました。今回の派遣が初めての海外になるメンバーもおり、不安要素を潰すことに必死でとにかくたくさん質問をしました。今でも印象に残っているのが、彼ら全員が笑顔で「良い経験になった」と話していたことです。私自身のドイツ研修も、ただの派遣で終わる事のないようにしようと思いました。

第 3 回学習会　令和元年 7 月 24 日（水）新宿コズミックセンター小会議室　17 時～20 時

・初級ドイツ語レッスン　エリン ファン ダイク（株式会社イーエーワークス）
・講義「ドイツ・ベルリンにおけるスポーツ・文化の捉え方」エリン ファン ダイク（株式会社イーエーワークス）
・講義に関するディスカッション

・派遣者ミーティング

　最後の学習会はドイツ語と、ドイツでのスポーツや文化の捉え方を学びました。
　エリンさんのドイツ語スピードが想像以上に速く苦戦を強いられましたが、ドイツに滞在経験があるメンバーに助けてもらい、楽しくドイツ語を学ぶことができました 。

新宿区長表敬訪問　令和元年８月１日（木）新宿区役所本庁舎３階　第１応接室
・新宿区長あいさつ
・出席者紹介
・青少年派遣者の自己紹介と抱負
・派遣団長あいさつ（新宿未来創造財団　管理担当事務局次長　諏訪 丹美）
・歓談
・記念撮影
・閉会

　派遣前に全員で参加をする最後のプログラムとして、新宿区長の吉住健一新宿区長を表敬訪問させていただきました。フォーマルな服装に身を包み、普段入ることができない部屋で自己紹介や派遣における目標などをお伝えしました。
　その後の歓談においては、区長が実際にベルリンに行かれた時の話や新宿における国際性の話など、貴重なお話をたくさん聞くことができました。個人的には、区長のように日本の良さをドイツの人に伝えられるようになりたいと思いました。

8 月 18 日 ～1 日目～

岸本彩

1 日の流れ

空港集合→日本出国→ミュンヘン到着→乗り継ぎ→ベルリン到着→ホステル到着

ついに来た 12 日間のミッテ区派遣。

換金などを済ませ集合場所に着くと、派遣員のみんなから、これから体験するであろう新しい経験、新しい環境に期待を膨らませて、僕、私は新宿区民代表だ！という自信が全身から満ち溢れているように見えました。

そんな中、期待に満ち溢れてはいるが満ち溢れすぎて興奮をしすぎたのか、とんでもない物を忘れた人がいました。その名は田畑美咲。私と同い年の彼女は、荷物を預ける際に必要な eTicket を忘れ(実は私も忘れた)、さらにはドイツの青少年へ送る日本のお土産を忘れたのです。このお土産は重要な物であるため、お土産を忘れた事に気づいた時の田畑の顔は、自分の行為を信じられず、恐怖に満ちていて、この瞬間の空気を私は一生忘れないと思います。(団長や岸田さんと話し合った結果大丈夫だろうという結論に至り、問題解決！よかった)

チェックインカウンターを通ったのは 10:00 頃、搭乗時刻は 12:35 予定。この 2 時間の暇をどう埋めるか、そう考えた時に目に飛び込んできたのは免税店でした。免税店とはご存知の通り、化粧品などが百貨店で買うよりも税金が無い分安く売られているお店であり、そんな魅力的なお店を気にならないわけがありません。私は気づいたら shu uemura の化粧品店に向かって歩いており、気づいたらリップを買っていました。

その後は搭乗口付近に座り、ドイツに行ったら何をするか、12 時間のフライトの間何をするか、ドイツで自分の英語は通じるのかという期待や不安が入り混じった会話をしていました。

そんな中我らがムードメーカー、田嶋りおは、かなでくんの帽子をかぶり、東京ドームで買ったサングラスをつけ、抹茶のドリンクを片手に座っていました。(浮かれすぎ笑、でもその気持ちもわかる。)

いよいよ搭乗時刻。自分たちの座席につき、まずみんなが行った事はなんの映画があるかの確認であったのではないでしょうか。(少なくとも私はすぐに確認をした。)

映画の主なラインナップは、洋画だとアリータ、ファンタスティックビースト、アリー、アクアマンなどがあり、想像以上に種類があって驚いたのを覚えています。

私が飛行機に乗っていて驚いた事は、男性の CA さんがいた事でした。私はアジアの国にしか行った事がなく、その時の CA さんは女性しかいなかったため、男性の CA さんがいる事はとても新鮮で、ジェンダーレス社会である今だからこその光景だと思いました。

高校生組は帰国した 3 日後には学校が始まるため、飛行機の中で勉強です。(偉い)

機内の映画だけでなく Netflix や文庫本があったため、私にとって 12 時間のフライトは(精神面では)思ったより短かったです。(でも体は正直で、フライト時間が 6 時間をすぎたあたりから足腰が半端なく痛かった)

ベルリン空港に到着をしたら、これから 12 日間通訳をしてくれる陽子さん、ミッテ区の職員であるオリバー、ノーベルトと合流をして、21 時頃ホステルに到着。

ホステルで遅めの夜ご飯としてカリーブルストを頂きました。

ドイツの人はよく食べるから量が多いのか、私たちの胃が小さいのか、疲れがピークに達しているのか…。理由は定かではありませんが、女子組のほとんどがカリーブルストを残してしまったため、男子組がその場に残り、最後まで食べてくれました(ありがたい)
そうして私達のベルリン派遣が始まりました。

8 月 19 日 ～2 日目～

長田明香里

1 日の流れ

ホステル出発→オリエンテーション@Werk9→ベルリン市内観光→ビアガーデン→展望台→ホテル到着

私たちの行動の中心となるベルクノインでオリエンテーションを行いました。ベルクノインは地元の高校生などの若者が、放課後に遊ぶための場所です。日本とは違い部活動がないので、このような場があります。ベルクノインは炭鉱をイメージした内装で、多くの青少年が利用しています。オリエンテーションでは、各自今回の研修中の目標、やりたくないことなどを話し合いました。

私は、ドイツの建築を実際に見て、日本との違いやヨーロッパ建築特有の構造などを見つけ、学ぶというのを目標にしました。そして、虫が苦手だから、虫に刺されることをやりたくないことに決めました。それぞれの目標、やりたくないことを聞いたことで、まだ何回かしか会ったことのないメンバーの興味をもっていることや苦手なものを知ることが出来ました。

そして、このミッテ派遣期間を通してのゲーム「シュッツエンゲル」のルールが説明されました。この「シュッツエンゲル」というは 1 人 1 人の顔が書かれているカードを引き、その引いた人を期間中にこっそり守るというゲームです。自分がメンバーを守り、また誰かが自分を守るという助け合いをします。最終日まで守る人は変わらず、最終日に誰が自分のシュッツエンゲルだったのかを当て、プレゼントを渡します。誰かを守るというのを意識的にしたことがなかったので、このゲーム説明をされた時に自分がその役割を果たせるのか不安でした。ですが、ベルクノインでのオリエンテーションのおかげで、より今回のベルリンが楽しみになりました。

ベルクノインは最終日にお別れパーティーを行う場所なので、ここで日本で用意してきた出し物をやれるんだと思いました。出し物は日本で少しだけ話し合いましたが、ほとんどのことが決まっていなかったので当日までに形になるのかととても不安でした。

ベルクノインでパスタ、ピザ、サラダを食べた後、バスに乗ってベルリンの市内観光に行きました。そこではブランデンブルク門などのベルリンの歴史的建造物を見て回りました。ブランデンブルク門はベルリンのシンボルの建物で、多くの観光客が訪れる場所の 1 つです。ブランデンブルク門の前でみんなで写真を撮ったり、ガイドの人からブランデンブルク門の歴史について説明を受けたりしました。

その他にもバスからベルリン大聖堂や戦勝記念塔なども見ました。その日はとても暑く、日本とは違う暑さにやられました。前回ベルリンに行った人から寒かったと言われていたので厚手のものしか持って行かなかった私には暑すぎました。その時に食べたアイスは最高に美味しかったです。ベルリン観光をしている時に多くのベルリンベアを見かけました。真っ赤なデザインがあったり、地球のデザインがあったりと１つ１つのデザインが違ってとても可愛かったです。すれ違うたびに一緒に写真を撮りました。みんなテンション高めでベルリンの町を楽しみました。

その後にビアガーデンで夕ご飯を食べました。昨日は１日中飛行機移動だったので、ようやくゆっくりドイツ料理が食べられました。日本と同じような感覚で料理を注文してしまったので、大量の料理が出てきて驚きました。ドイツ人にとっては、日本の料理は量が少ないのかなと思いました。ビアガーデンの中にライブスペースがあり、何分かおきにスタッフの人が乾杯の歌を歌ってくれていました。みんなでその歌に合わせて乾杯をしたり、歌を歌ったりして楽しい夕食でした。

食事中に通訳の陽子さん、ベルリン市の役員のノーベルトと英語で会話をする機会がありました。私はとても緊張して全く英語が喋れなかったので、英語が喋れるのは本当にいいなと痛感しました。

夕食の後は、テレビ塔を見るために近くの高いビルの屋上に行きました。そこからはベルリンの町を見渡すことが出来ました。行った時間が夕方ということもありとても綺麗な夕日が見られました。ベルリンにはあまり高い建物がないため、夕日が水平線まで広がっていました。

ベルリンの街並みは日本とは違ってのびのびとしていました。道幅は広く、高い建物はない。過ごしている人も日本で感じるギスギス感、せかせかしている感覚は全くなく、ゆったり時間が流れているように感じました。国によってこんなにも感じ方が異なることがあるのかと思いました。ここで感じたことを大切にしていきたいです。

8 月 20 日 ～3 日目～

大土井千紘

1 日の流れ

オリンピアスタジアム→近くのレストランで食事→Alexandra Platz へ移動しホストファミリーと初対面、ボウリングで交流→自由時間（各々で夕食）→ホステル

まずはホテルから歩いて U-Bahn に乗った。途中で見たのは、いらない服を入れるとアフリカなど発展途上国へ送られるという服のリサイクルボックス。これは素晴らしいアイデアだと思うので、日本でも GU とかに行けばあった気はするが、街中にどでんと置くレベルで普及させたらいいのになぁと思った。

あと、ベルリンの電車は、窓ガラス一面にブランデンブルグ門（遠近法がおかしいやつ）が散りばめられていて、私からしたらすごく可愛い（在独日本人に言わせると主張が激しいとのこと）。皆さんもぜひベルリンに行き、「あぁ、これが報告書に載ってた遠近法のおかしいブランデンブルク門の地下鉄か」と思っていただきたい。すごくドイツらしいから。

私事ではあるが、小学校の時にベルリンにほぼ 3 年住んでいて、その家の最寄りを通過したものだからまたまたシャッターを切りまくった。余談だが、ほとんどがブレブレだった。

駅から少し歩き、たどり着いたのが Olympia Station で、ヒトラーが作らせた競技場。私はもう感動しまくりだった。私の元の家からここまでは本当に近くて、何回も来たのを鮮明に覚えていたからだ。なにも変わっていなかった。競技場全体が石畳で、とても重厚な雰囲気を醸し出している。すごく懐かしくて、涙が出そうだった。(笑)ほかの人もその造りには驚いていた。

ジェニーさんが案内をしてくれ、陽子さんが同時通訳をするという形であらかた回った。中でも印象的だったことを挙げると、①ナチスの鐘 ②ヒトラーの席 ③P!nk である。

①ナチスの鐘

ナチスは、そもそも権力を示すために、そして市民に対して善良な政党であることを示すためにこのスタジアムが作りたかったらしい。その一貫として、ミッテの旗にも載っている鷲（鷲はナチの象徴でもあるとか）と、縁にナチのマークが入っている鐘を作ったという。しかしこの鐘は戦争が終わったあとの火事によって塔から落ち、今は外に展示してある。加えて、ナチのマークは下の部分が埋められている（写真参照）。そのことは、知らなかったのでとても驚いた。そんなもの、壊してしまっていそうだが、ロシア兵が銃でその鐘に穴を開け、そしてマークを埋め潰し、鐘自体は残すという行動が印象的だった。斬新。

②ヒトラーの席

ヒトラーは皆さん知っての通り自己顕示欲に溢れているので、座る席ですら他の人と違っていたくて、隣に誰かが座るのが嫌だったようだ。そのため、ヒトラーの座る席の台座だけ、少しだけ飛び出ている（または、いた)。または、と書いたのも、この場所も同様に、連合軍に「ヒトラーを連想させる」とされその飛び出た部分が削られ、少ししか残っていないからである。これもまたまた、ちょっと削るという行動が奇想天外でとても面白いと思った。

③P!nk

何を隠そう、私は P!nk が大好きだ（P!nk とは、洋楽の歌手)。ちなみにオススメは What about us と Where we go という曲、パワフルな声にきっと元気になれるからぜひ聴いて欲しい。じゃなくて、その P!nk は、私がスタジアムに行った少し前にそこでライブをしたのだ。何が言いたいかというと、オリンピアスタジアムは Herta というブンデスリーガのチームのホーム（？）であることは皆さんご承知だと思うが（知らないって？今知りましたね。)、そういったライブだったり、そこの職員のサッカー大会だったりにも使われるのだ。そこで注目したいのは、変わり身の早さ。いまはただの部屋であるところが、Herta の試合があればドリンクスタンドになり、P!nk のライブであればショップになり、また、職員のサッカー大会であれば芝生は職員のために整備される。そんな、順応に対応できるようなスタジアムだと、案内役のジェニーは話してくれた。なぜそんなことをするのか、それはスタジアムがベルリン市の持ち物で、しかも歴史的に価値が高いため、改造することが許されていない。だからこその工夫が散りばめられているのだという。新と古の融合。そんな説明を受けた。

そして午後。とうとう、一部の人はホストファミリーと初対面の場、そう、ボウリングが近づいていた。かくいう私のホストファミリーは、このボウリングだけでなく、ほぼ全てのイベントに参加してくれていたため、もちろんここで顔を合わせることになった。緊張が走る…しかし！ソフィア（私のホストファミリー）はものすごくいい子で、そんな不安なんてコンマ 1 秒で過ぎ去った。他には、奏さん、きょうすけのホストファミリーに加え、前回の派遣員で、独学で日本語を学びペラペラに喋れるニックも来てくれた。そして、みんなでボウリングをやった。きょうすけとがくとは「やばいやばい英語無理」みたいなことを最初は言ってたけど、最終的には打ち解けていた。スポーツは、やっぱり万国共通なんだなと感じた。

ボウリングが終わった後は、自由行動で、最低 1 人のドイツ人と 3 人以上で行動するように、と言われた。そこで、私はあかりとしずか、ソフィアとともにベルリンの街へ繰り出した。まず、早めの夜ご飯。そこが Alexandra Platz だったので、一通りのものは揃っていたが、私ゴリ押しの「ベルリンに行ったら食べるべし」であるケバブを日本勢は食べ、ソフィアは隣のお店でチャイニーズヌードルを買った。そしてみんなで外の席で食べた。日本と違うのは、その“外の席„というのが、隣を路面電車が通過し、人通りの激しい道路に面していて、そこにテーブルと椅子があるのだった。日本では為せない技だと思った。なぜなら道が狭いからである。本で読んだが、ヨーロッパと日本だと道や広場の出来方が違うらしい。日本は道の途中に広場を作り、ヨーロッパは広場をつなぐために道を作る。そして Alexandra platz は広場である。その後もぶらつき、門限には帰宅。帰ってからは毎晩、サヨナラパーティーのためにみんなで集まったり、一つの部屋に集まってゲームをしたりしていたが、この日はゲームをしたと思う。そうやって、日本人同士でも友情が深まったのはとてもいいことだと思う。ただ一つ言うなら、うるさくなりすぎないようにしよう。警備員さんはめっちゃ怖い。

8月21日 ～4日目～

西島康

１日の流れ

ホステル→区長表敬→ランチ＠社員食堂→歴史博物館→ホストファミリーと対面＠Werk9

ホステルで朝食をとってから集合場所へ行くと、既に何人かの派遣員がシャキッとした立ち姿でそこにいました。今日は区長表敬訪問が日程に組み込まれていることもあり、全員、制服やスーツといういでたちです。いつもよりもかしこまって見えて気持ちが引き締まります。

全員がそろったのを確認し、早速ミッテ区役所へ出発しました。徒歩で向かいましたが、道中はそれぞれが思い思いにドイツ語の自己紹介を反復したり、区長への質問を考えたりしていました。区役所に到着し、役所内を見学し説明を受けました。今回訪れた区役所は、前回の派遣団が訪問した役所とは異なる場所です。どういうことかというと、隣接市町村が統合されてできたミッテ区には３つも区役所があるのです。ちなみに最も大きな役所（東京都でいう都庁のようなもの）はアレクサンダープラッツに所在します。実は新宿区も３つの町村が合併してできた区だということで、似通った点がある様です。今回、あいにくミッテ区長の都合がつかずお目にかかれなかったことは残念でした。しかし、区長の代わりに区議のカイザーさん、青少年課のクラメさんが温かくむかえてくださいました。私たちは予定していた通りドイツ語で自己紹介をし、それから一人ずつ全員がカイザーさんへ質問をしました。それぞれの発言にはドイツ流の拍手を送りました。これは拳で机を叩くというもので、カイザーさんが教えて下さったのです。カイザーさんからは　ミッテ区が行っている施策や国際交流事業について等、様々なお話をうかがいました。

表敬訪問修了後、そのまま区役所の社員食堂へ寄りそこでお昼にしました。面白い経験でした。カイザーさんたちも一緒に来てくださったため、さらにお話を続けることができました。派遣員全員がこの機会を喜び、追加の質問をしました。中でも興味深かった２つの質問を書きたいと思います。１つは、バリアフリー対策に関する質問でした。新宿区でよく見かける点字ブロックをミッテ区では全く見ませんでした。その事を踏まえてバリアフリーに関する施策についてうかがうと、「公的機関はバリアフリーに配慮しているが、サインや点字の充実は今後の課題だ」とのことです。歴史ある建造物が多い事から景観を維持しつつバリアフリー化を進めていこうと努めているそうです。

２つ目の質問は、ペットボトルリサイクルについてでした。ドイツの環境施策は先進的であり、ペットボトルはもれなくリサイクルされています。街を歩いて私も気づきましたが、デポジット制導入により、スーパーなどでペットボトルを回収することが徹底されています。ビンのリサイクルはかなり以前から行われており、その次にペットボトル、最後に缶がリサイクルされるようになったというお話でした。ペットボトル自体はワ

ンウェイリサイクルですが、リフィルというシステムも導入し始めたそうです。カイザーさん、クラメさんとお話ができて大変勉強になりました。充実した時間を過ごせたことをとてもうれしく思います。

次に、歴史博物館を見学しました。ここには 7,000 あまりの展示物があり、最も大切なものを抜粋して展示しているのです。ガイドさんが、展示物について興味深い解説をしてくださいました。例えば以下のようなことです。

１枚目の写真を見て下さい。プロイセンの王様、フリードリヒ 2 世の軍服です。フリードリヒ大王と呼ばれたこの王が亡くなる直前まで好んで着ていた「ユニフォーム」がこれです。国の軍服を王様が着ていたということはかなり珍しいことです。フリードリヒ大王は倹約家で豪華な服装ばかりを好んだわけではなかったと言われています。残された服を眺め、王のお人柄が垣間見えるきがしました。なんと軍服にはたくさんのタバコの粉によるシミまでが残っているので、ついその時代に思いを馳せてしまいました。

２枚目の写真は、ドイツ外務省の官僚が使用したといわれる地球儀です。第二次世界大戦中に作戦を練る為に使われたそうです。地球儀の表面にある傷が気になりますがこれはロシア軍がドイツの各所を銃撃する度に付けられた印だといいます。もう存在しない国であることを覚悟するためだったそうです。日本にいて教科書の上でドイツについて学習するのとは異なり、実際に現地の博物館で現物を目の前にしてお話をうかがうと、よりその史実が心に染みてくるようでした。

一日の最後には待ちに待ったホストファミリーとの対面が控えていました。日本を出発する前からメールで何度となく連絡を取り合ってきたホストファミリーといよいよ会えるのです。ずっと楽しみにしてきた今日のこの瞬間、ワクワク感が募る一方で、少し緊張しました。派遣員たちは口々に「少し不安だけど楽しみ。」と言って同様の感覚を共有しました。さあ、いよいよご対面！陽子さんが一人ひとりの名前を呼ぶと皆嬉しさいっぱいの笑顔でホストシスターやホストブラザーとハグしました。その後はお互いについて話すことに夢中でした。Werk9 の方々が用意してくださったフルーツ・お肉・パンなどを仲よく一緒にほおばりました。沢山お話をしました。ふと周りを見ると他の派遣員たちも愉快に過ごしていました。私のホストファミリーは家族４人全員で来てくださって熱烈な歓迎ぶりに心温かくなりました。大好きなご一家と知り合えたことは私の宝物です。

滞在 7 日目から日本人派遣員たちは別行動となり、それぞれホストファミリーと過ごします。この国際交流派遣の素敵な山場です。

8 月 22 日 ～5 日目～

瀬端亨介

1 日の流れ

ホステル出発→Gollmitz へ移動(途中レストランにて昼食)→

Gollmitz 到着後パン作り体験→ 外で BBQ→キャンプファイヤ→外のテントで就寝

ホステルにも慣れ、実家のような安心感に包まれ起床し、朝食を済ませ集合時間にロビーに行くと二人のメンバーが昨夜のうちに部屋に置いていたはずの財布の中身が盗まれたという話を聞きました。どうやら部屋の扉が半開きになっていたらしく、友達の部屋で談笑しているうちに行われたという事でした。日本では考えられないようなことが早速起こり、ここは日本ではないんだなと改めて痛感し、ドイツの洗礼を受けた気がしました。

その後青少年達を含め二手に別れ、車に揺られ Gollmitz に向かいました。途中レストランにて昼食をとりました。天気も良く、開放感のあるバルコニーで食べる昼食は格別でした。しかし、ドイツ料理のあまりの量に驚きを隠せませんでした、これがドイツ人の平均身長が 180cm という高水準を出してる秘訣なのかと思いました。昼食を食べ終わると併設されている広場(芝生) にて、全員で鬼ごっこをしようという話になり、皆んな満腹の中、気分はさながら 5 歳児のように全力で駆け回りました。そして再び車に乗り Gollmitz に向けて出発しました。

宿に着くと直ぐにパン作り体験をしました。パンも釜もとても大きく圧巻でした。その後の自由時間にはホテルと広場を探検しました。大自然の中、思うままに遊び回り、心も体もとても癒されました。日が落ちると急に気温が下がり、夏とは思えないような寒さでした。夜になるとキャンプファイアが始まり、Oliver（オリバー）が自作の曲を弾き語りしてくれました。その後 Sophia（ソフィア）が練習していた、Shawnmendes の Stitches という曲を歌いました。満天の星空と焚き上がる炎を背に大いに楽しみました。その日は私を含め 3 人がホテルではなく、外のキャンプ場でテントを張り、そこでドイツ青少年達と一緒に寝ました。青少年と一緒に過ごすという緊張もあり少し不安だったのですが、不安はいつのまにか消えていました。外はとても冷えていたのですが、テントの中は案外暖かく、また足を伸ばして寝ることができました。朝は自然に囲まれながら鳥のさえずりを聞いて起き、最高の目覚めをしました。

8 月 23 日 ～6 日目～

田嶋　莉大

1 日の流れ

ディスカッション→ゴルミッツ出発→チョコレート工場→お城をお散歩→

ランチ→ベルリン到着→ホームステイ

いよいよこのドイツ青年交流も折り返し､6 日目です｡新宿青少年達やホストブラザーたちとも仲良くなり、ドイツの生活にも慣れてきました。

6 日目最初に行ったのがディスカッション、自分の未熟さを体感しました。と言うのも、英語力のなさなどが、このディスカッションに表れました。ディスカッションのテーマは日本の文化とドイツの文化の違い。1 グループ 8 人くらいの規模を 2 つにわけて、順番で自分の考えを英語で発表するという形でした。やはり、日本の文化の特徴を具体的に説明するのは難しかったです。なので、しっかりと英語力を上げ、積極的に意見を言えるようになりたいとディスカッションを通して感じました。

ディスカッションが終わった後は、ゴルミッツを出発しチョコレート工場に行きました。（と言ってもアイスを食べただけでしたが。）

好きなアイスをオリバーが奢ってくれました！日本では見かけない味もあり、自分はストロベリーチョコレートマシュマロアイスを食べました。すごく甘いけど美味しかったです。

チョコレート工場に行った後は、散歩がてらお城に行きました。お城の名前はボイツェンブルク城。住宅街にあって地元の人からも親しまれているとか！ドイツにお城がある感覚は、日本にお寺や神社がある感覚と同じなのでしょうか。それにしても、すごく綺麗ででかい！まるで映画のような世界でした。

お城に行った後はオーガニック料理を食べに行きました。6 日目にもなるとみなさんわかってきていると思いますが、どの料理にも必ずポテトが付いてきます。もう、当分ポテトはいいです。

お腹をいっぱいにした後には、近くの木で寝そべる人や近くの教会で写真を撮る人など色々な思い出を作りました。

いよいよ穏やかな街ゴルミッツを離れてベルリンへ戻ります。ホステルへ着くとホストファミリーがお出迎え、新宿区の青少年のみんなともしばしお別れです。

ホストファミリーの家に着くと自分用の部屋が用意されており、そこには「ようこそ」の文字が！予想しなかった歓迎に驚きました。ホームステイ前は、ホストファミリーとちゃんと会話ができるのか不安でしたが、数日前から連絡を取り合っていたので、思った以上に会話はスムーズに進みました。ゆっくりする間も無く、ホストブラザーのレオンと一緒にクラブへ行き、楽しい時間を過ごしました。充実した 6 日目になりました。

※ベルリンは世界的にクラブが有名。ドイツの高校生は遊びでクラブに行くことも多いらしいです。ドイツは 16 歳からお酒（アルコール度数の低いビール）を飲むことができますが、自分は飲んでいません。日本とドイツの高校生の遊び方が全く違うことを体感しました。

左 1 枚目の写真は、オーガニックレストランでの集合写真です。ご覧の通り、品数も量も多かったです。オーガニック料理を日本で食べることがあまりないので、新鮮でした。

左 2 枚目の写真は、ドイツ人のロマンと男子高校生 3 人組。ゴルミッツで仲を深めました。

8 月 26 日 ～9 日目～

森岳人

1 日目流れ

ホストブラザーと学校へ→青少年と合流しスタジアムへ→スクリーンで歴史を学ぶ→
実際にサッカーを体験→ショッピングモールへと移動→ホステルへ

ついに 3 日間に及ぶホームステイ生活も終わりを迎えました。朝早くから、ホストブラザーと共に学校へ向かい、授業を受けました。学校の雰囲気は、わきあいあいとしており、生徒主体の授業作りがされていました。生徒一人一人がしっかりと発言をしているところから、外国人の積極性はこうして育まれるものなのだと感じました。

そして、待ちに待った日本人青少年との対面。それぞれが、この 3 日間で経験したことを話し合い、話題がつきませんでした。午後は、ドイツのサッカー1 部リーグに所属する Union F.C のスタジアムの見学に行きました。私自身、サッカーの大ファンであったため、このようなチームの見学に行けることは、大変幸せなことでした！

中に入ると、大きなスクリーンから、チームの様々な歴史を学びました。このチームは、もともと民間の人々の力によって設立されたため、スタジアムや必要な施設などを自分たちの力で一から作り上げていく必要がありました。それにより、ファン自身が必要な材料を集めて建設を進めたり、株の一部を売って資金を捻出するなどの努力をしてチーム作りを進めていきました。

こうした努力を続けていくうちに、自然とファンとチームの結びつきは強くなり、今ではクリスマスやワールドカップを一緒に祝うなど、ドイツリーグの中でも他一倍ファン同士の結束が強いチームとなったそうです。この話を聞いて、スポーツと人々によって結びつくもの、それによって生み出されるものに気づけたような気がしました。

スタジアムを出ると、差し入れで頂いたケーキを食べ、その後実際に自分たちでサッカーを体験することになりました。日本人青少年に加えて、ドイツの青少年であるソフィアとルヴィスも参加しました。ルヴィスは、ゴールキーパーとしてドイツの世代別代表に選ばれるほどの実力の持ち主であり、私達より遥かにプレーが上手であり、驚きました。

実際に体を動かすことはとても楽しく、私たちは時間を忘れてサッカーを楽しみました。あまりにもはしゃぎすぎた私と享介は、足の皮がめくれてしまうハプニングを起こし、引率であるオリバーに大変心配されました。しかし、それぞれがドイツのスポーツ文化に触れて、充実した時間を過ごすことができました。

夜になり、ショッピングモールへと向かった私達は、各々の買い物を済ませて夕食を食べました。ドイツに来てからというもの、ジャガイモを主食とした料理が多かったため、麺が恋しくなった結果、フォーを食べることにしました。それぞれが夕食を楽しみ、沢山話した結果、ホステルへの集合時間が遅れてしまいました。こうした自覚の無さが現れ、1日を気持ちよく終わらせることができませんでしたが、それでも充実した1日を過ごすことができました。

8 月 27 日 ~10 日目~

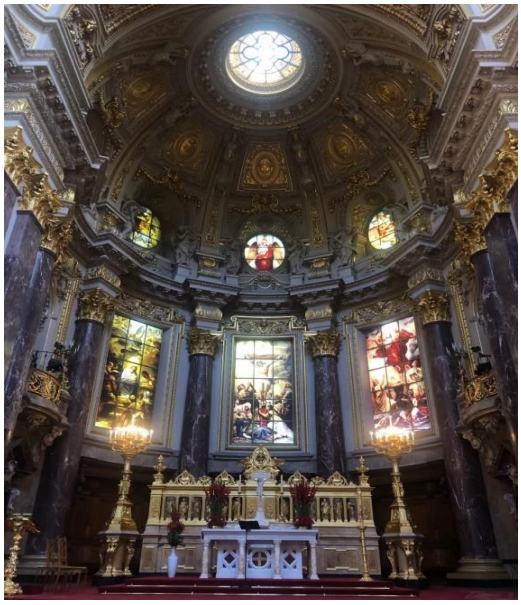
新倉有紗

1 日の流れ

ホステル→自由行動（ベルリン大聖堂）→T シャツ作り→ディナー→ビーチバー→ホステル

この派遣も気づけばあと 3 日。

午前中は丸々自由時間ということで、私は派遣メンバー5 人とドイツ人青少年のニックと共にベルリン大聖堂へ向かいました。と、その前にジェラートでエネルギーチャージ。振り返れば、この派遣期間は非常に天気に恵まれ、当初聞いていた以上に暑い日々が続いていました。現地の方によると、こんなに暑さが続くのは異常なんだとか。日本でも異常気象を感じていましたが、ドイツでも同じことが起きているのかと地球規模での温暖化の脅威を感じます。



さて、話を元に戻します。ベルリン大聖堂はシュプレー川の中州に位置します。すぐ目の前に川があり非常に面白い場所にあるなと思いつつ、ヨーロッパの歴史を感じさせる荘厳さに感動しました。何度も前を通っていましたが、未だ中に入れていなかったので、非常に楽しみにしていました。チケットを買い、中に入ると外観に劣らない美しい内装に圧倒されました。大天蓋までの高さは 114 メートル。優雅で広々とした空間が広がっていました。椅子に座りゆっくり見まわしたり、歴史あるお墓の装飾をじっくり見たり、各々堪能した後、ドームに登りました。その途中、戦争で空襲を受け、被害にあったことがわかる展示がされてあり、今日の大聖堂は修復・再建されたものでありますが、今もなおベルリンの人々にとって重要な建築物であることが感じ取ることができました。

270 段の階段を上ると展望台となっていて、ベルリンの街を一望できます。所々工事中の場所も見られますが、シュプレー川に沿って広がる緑に心地よさを感じました。十分すぎるほどの日光を浴びてはいましたが、美しいベルリン街を俯瞰でき、大満足です。階段を下りている最中、中から聴こえるパイプオルガンの重厚な音色に後ろ髪をひかれつつ、大聖堂を立ち去りました。

午後はＴシャツづくりをしました。このワークショップのきっかけは、ミッテ区の方々が日本に派遣で来た際、様々なマンホールがあることに気づかれたことがきっかけだそうです。たしかに、日本には「ご当地マンホール」なるものがあったりと多様なマンホールのデザインがありますが、それをＴシャツに写そうと考えたこともありませんでした。芸術家のエバがまずやり方を説明してくれました。マンホールにインクをつけてＴシャツを置き、上から麺棒でしっかりこするという流れで一見簡単そうに見えたのですが、実際にやってみると意外と上手くいきません。というのも、天気が良かったため地表温度も高く、インクを塗ってもすぐ乾いてしまうのです。ドイツ人の青少年とチームワークを発揮して、だんだん上手く写せるようになりました。

ブランデンブルク門周辺で作業していたので、通りがかる人々に見られたり話しかけられたりしました。もし東京でやったら冷めた目で見られそうですよね。日本ではやらないことができ新鮮でした。ワークショップ後、エマのお話を聞いていて、「街にあるものを芸術化する」豊かな感性に感銘を受けました。忙しなく通り過ぎている道にも、心に少し余裕を持てば思い出に残す方法が潜んでいることに気づかせてくれました。何もかもが便利になっている世の中で、あえて「スロー」を選ぶ。ハイテクもローテクも知っている時代だからこそ、どっちに偏るというより、両方を活かしていくことが、これからの時代を生きていく上で人々が豊かな生活を送るために必要なことなのではないかと感じました。

夕食後はみんなでビーチバーへ。向かった先は２日前にホストファミリーのサラと朝食に訪れた場所でした。「ビーチ」とは言いますが、シュプレー川沿いにあるバーです。夜にはライトアップされ人で賑わっているので、朝とは全く雰囲気が違いました。

この場所は、もともと再開発のために立ち退きを迫られていたところ、ベルリン市民が反対して守られたそうです。私たちがいるバーに隣接するように農園や住宅があり、持続可能なコミュニティーを目指した、いわば「エコ・ビレッジ」です。若いベルリーナーのヒッピーさを感じられる素敵な夜となりました。

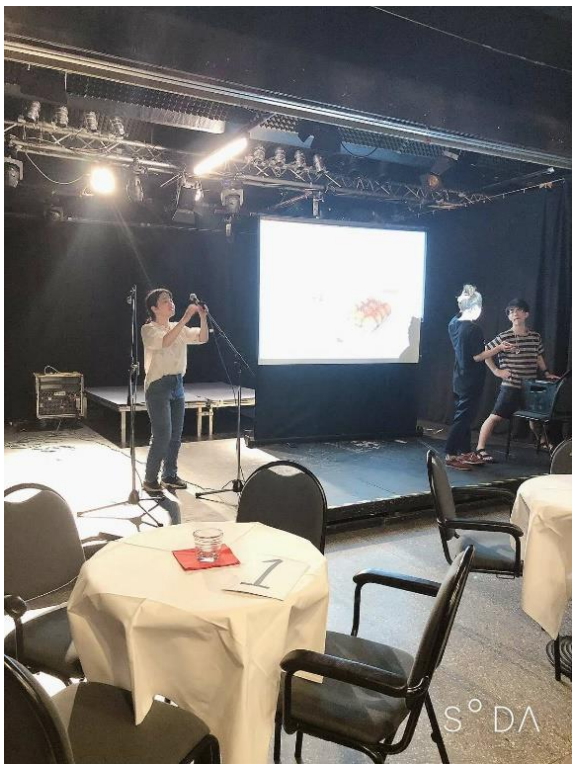
ついに明日はさよならパーティー！！果たして成功するのか、ドイツの方々に喜んでいただけるのかと不安はありますが、きっと私たちなら大丈夫（なはず(笑)）！感謝の気持ちを上手く伝えられますように！！

8 月 28 日 ～11 日目～

秦悠乃

1 日の流れ

まとめミーティング@Werk9→さよならパーティーの準備→ランチ＆自由時間→
さよならパーティーの準備→さよならパーティー本番

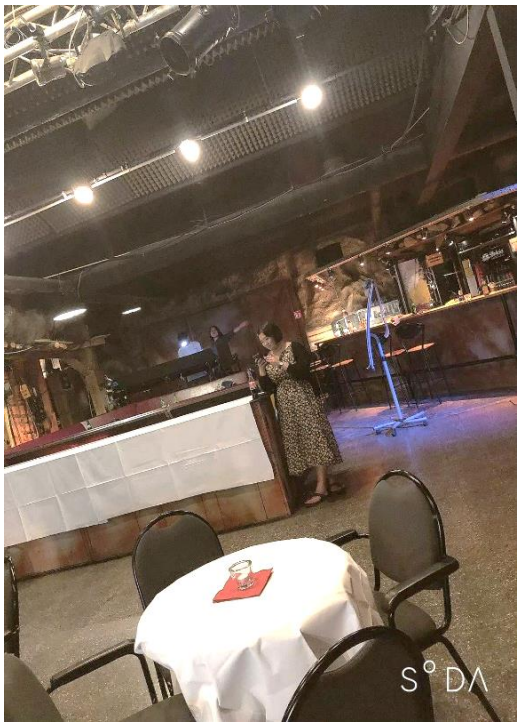


この日は、ベルリンで 1 日過ごせる最後の日で、さよならパーティ当日です。ホテルでパンとハム、サラダ、チーズのバイキング形式の朝食を食べた後、昨日夜遅くまで作業をしていた人がいるため、遅めの 10 時にロビーに集合しました。バスで Werk9 まで向かい、Werk9 で通訳の陽子さんとまとめミーティングを行いました。初日とゴルミッツでのミーティングで立てた目標を一人ずつ再確認し、達成できたか発表しあいました。また、陽子さんが今回のベルリン滞在を植物の成長に例えて、様々な交流プログラムで得た「肥料」で自分たちが成長できたこと、12 日間の滞在が終わっても成長は止まらないのだということを話していました。私自身今回の滞在で自分の視野が広がったので、陽子さんの言葉に共感しました。同時に、初日から始めたゲーム「シュッツエンゲル」の相手の発表もありました。自分の「守護天使」としてこっそり自分を助けてくれていた人に、用意したプレゼントを渡しました。相手が意外な人で驚いている人が多かったです。陽子さんに感想を聞かれると「みんな助けあっていたので分からなかった」との意見がたくさん出ました。

その後、Werk9 にてさよならパーティーで使う新聞紙で作った兜とプレゼントとして渡す折り紙の準備をみんなでしました。Werk9 が昼過ぎまで使えなくなるということで、一旦自由行動になりました。私は Werk9 の近辺をぶらぶらして、お昼を食べる場所を探そうとチェックポイントチャーリーまで行きました。チェックポイントチャーリーは東西ベルリンを分断していた検閲所で、その前には標識が立っています。標識の裏表にはそれぞれアメリカとロシアの兵士の絵が描かれていて、アメリカ兵は東ドイツを、ロシア兵士は西ドイツを向いています。標識が当時の状況を鮮明に描写しているのが分かりやすかったです。一方、現在チェックポイントチャーリーは観光地になっており、

周囲には土産屋がたくさんあって平和な時代になったと感じました。

何を食べるか迷った結果、私は昼食にカリーブルストを食べました。独特のカレースパイスとジューシーなソーセージの組み合わせに、あつあつのフライドポテトがとてもおいしかったです。
実は、初日にも食べたので食べるのは２回目なのですが、ベルリン名物で日本では食べられないのでいい思い出になりました。日本でも食べられればいいのに…。



2 時頃に Werk9 に戻ってきた後は、みんなでさよならパーティーに向けての準備をしました。パーティーの案内に使う折り紙をみんなで折ることになり、折り紙が得意なメンバーが苦手なメンバーに教えてくれました。私は不器用なので周りに教えてもらいながら、なんとか折り紙のハートを完成することができました。その他のメンバーは折り鶴などもっと難しい折り紙に挑戦していました。折り紙が一段落して少し休んだ後、さよならパーティーで披露する「だんご三兄弟」「ソーラン節」のダンスの練習をしました。私はダンス班ではないので、全く踊れなかったけど、前から練習を重ねていたメンバーのダンスはキレがあって驚きました。その後、最後に全体で一度リハーサルをしました。プロジェクターの不具合があったものの、大まかな進行の流れを掴むことができました。私は特にパーティーでテーブルごとにつくファシリテーターだったので、パーティーの流れを確認できたのは助かりました。気がついたら食事がビュッフェ形式に並べられていたり、お皿とろうそくが各テーブルに用意されていたり Werk9 がパーティーらしい雰囲気になっていました。

スケジュールもゆったりしていて、最後の自由時間を満喫することができた１日でした。

一方で、ミーティング中にベルリンでの滞在を思い返したり、最後のイベントであるさよならパーティーの準備をしたりする中で滞在がもう終わってしまうんだなということを嫌でも実感させられました。毎日とても充実していて楽しかったので東京に帰るのがとても寂しくなりました。

～さよならパーティー～

田畑美咲

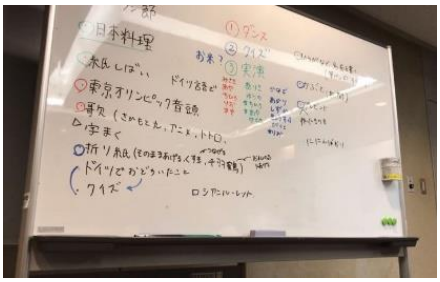
様々な準備を急いで終わらせた私たち。いよいよさよならパーティー本番です！　！

……と、その前に、直前の記事で悠乃ちゃんが述べた当日準備以外に、私たちがしてきたことについてお話します！

まず、7/10 の第 1 回事前学習会。

この日の学習会の最後に、さよならパーティーについて初めて話し合いました。

…ですが、初対面の我々派遣者。緊張と遠慮で思うように話が進みません。



この日は、①ダンス　②クイズ　③実演の三部構成で進めることを仮案とし、3 班に分かれて検討を進めることにしました。

その後、各班で大学生が主体となり検討を続けましたが、時間的・金銭的に実現が難しいことも多々あり、様々な案が出てはボツになりました。

そんな日々が 1 か月ほど続き、やっとやることが大まかに決定したのは出発のわずか 5 日前(！)

出し物のメインをクイズとし、その景品を実演班が用意、さらにダンス班が歌やダンスの用意をすることが決まりました。

しかし、詳細は決まっていない状態でドイツへ出発することになりました。

案の定(？)ドイツでの日々は楽しく忙しく過ぎていき、各班の話し合いは少しずつ進む一方、全体での話し合いが圧倒的に足りず、準備が間に合わない危機に……！とうとうさよならパーティーの前々日と前日、具体的に詰められていないことに焦りを感じた私達は、前日 23:00 からホステルのロビーで話し合いや準備を進めることで、どうにか最終決定まで漕ぎつけました！

そして、ようやく迎えた、さよならパーティー当日！

当日準備の詳細は前述の通りなので、ここでは本番についてお話します！

まず、準備が終わり.....そうなときにホストファミリーが続々登場！！折り紙で作ったハートや兜、紫陽花などを使って来場者の方々をクイズ用にグループ分けし、席にご案内しました。このパーティーには、前日の T シャツ作りでお世話になったエバさんや、ミッテ区長表敬の際にお世話になったガイザー議員も来てくださいました！

会の初めには、ガイザー議員や、我らが諏訪団長から挨拶がありました。

　そして、そのあとがついに私たちのターンです！
折り紙で分けたグループ対抗で日本についてのクイズを進める中で、

📷(パワポクイズ画像)
Q.What sweet is made of rice?
A.1 Yatsuhashi
　2 Imokenpi
　3 Dango

というクイズの答えに合わせて、だんご３兄弟を踊りました。
……なんともシュールで総員大爆笑。まさかのアンコールを求められ、このシュールなダンスをドイツ人青少年たちと一緒に踊りました。

　そして、その後もクイズ大会が盛り上がりを見せる中、私たちは最後の問題として

📷(パワポクイズ画像)
Q.Where does come from area Soranbushi?

という難問を仕込み、それに関連づけて南中ソーランを踊りました。
　踊る前には、ソーラン節や、そのかけ声「どっこいしょ！」「ソーラン！」について説明を行い、ドイツ人にも掛け声をしてもらいながら踊りました！
.....がここでまたアンコール！！

　皆様ご存知の通り、とびっきりハードな運動量を誇るソーラン節をドイツ人と共に再び踊り、思わず会場にいる全員が手で扇がずにはいられないほどの熱気の中(Werk9 には冷房がないのです！)、無事に私たちの出し物が終了しました！
　そして、我々日本人派遣団の引率、岸田さんからのお話と音頭で乾杯です。

　食事をとりながら、派遣者各々が、ホストファミリーと共に最後の夜を過ごしました。
　しかし、楽しい時間はすぐに終わってしまうものです…。
　先程までの盛り上がりとは打って変わって悲しいお別れの時間です。

ドイツ人青少年とはまた 4 月に日本で会えますが、他のファミリーとは次に会えるのがいつになるかわかりません。

このさよならパーティーを迎えるまでの間、私たちには多くの課題がありました。日本での事前学習会の時から、自主性・積極性の欠如が目立ち、派遣が始まりドイツに到着してからは度々時間へのルーズさが露呈しました。

大学生から全体へ注意を呼びかけることも多々あり、最年長の 2 人に大きな負担がかかっていました。

しかし、最終日が近づくにつれて、全員が自主的に動くことができるようになり、さよならパーティーでは、個々人が自分に出来る最高のおもてなしやパフォーマンスをすることができました。

この日、派遣者が皆で協力して作り上げた出し物の披露や、お世話になったホストファミリーとの別れなどを通じて、様々な感情が詰まった、一生思い出に残る最高のさよならパーティーを経験することが出来ました！

8 月 29 日 ～最終日～

合田摩弥

1 日の流れ

ホステル→ベルリン空港→ミュンヘン空港→羽田空港

いよいよ日本に帰る日です。昨夜にみんな荷造りしていたのですが…。お土産でスーツケースがしまらない、しまったとしても 23 kgを超過しそう…。みんなホテルにあった体重計で自分のスーツケースを確認したり、機内持ち込みの荷物を増やしたりして対応をしていました。

ノーベルトとオリバーの運転する車に乗って空港に向かいました。車内で美咲ちゃんと話していましたが、本当にこのドイツでの過ごした日々が信じられなくて早かったこと、そして自分がドイツにいたという気分を一瞬も感じなかったことを話していました。ドイツにいながらずっと疑問だったのは、自分が外国にいる、ドイツにいるという感覚が全くなかったことです。羽田を出発したとき、ミュンヘンで乗り継ぎをしたとき、ベルリンに就いた時、日本語の表記がなく標識が全部ドイツ語だったり、身長の高いドイツ人のおじさんに出会ったりしたときにドイツにいると認識することができたのに、一瞬も感じることが出来なかったのです。自分がプログラムに精一杯取り組んでいたのか、それともドイツの雰囲気が日本に似ていたのか…。私が考えたうちの 1 つに、自分の中でドイツという違う文化を受け入れる態勢ができていたのかな、ということです。今まで海外に行ったときは、どうしてこうも日本と違うのだろう、と日本と外国の差にしか目がいかなかったけれど、今回はその違いに過敏に反応することなく、むしろその違いをドイツらしさとして自分の中で受け止められたのではないかと考えました。

空港についたら、アーニャが娘さんと一緒にランチボックスを届けにきてくれました。リンゴが丸ごと入っていてこれが外国スタイルだ！と驚きました。アーニャ、ノーベルト、オリバーは検査場に入るぎりぎりまで見送ってくれました。ありがとう！また来年ね！！

ベルリンからミュンヘンへ。ミュンヘンのゲートまでみんなで行き、待ち合わせ時間を確認して解散しました。最初、ルフトハンザから出発時間を遅らせると連絡があったのに、まさかのその時間が早まった！！それを途中で知り、空港をダッシュしました…。海外の空港会社、すごいな、日本じゃまったく考えられないなぁ…(笑)ミュンヘンから羽田までは何事もなく到着しました。お疲れ様でした、これからはドイツの受け入れの準備をみんなで頑張ろう～！

大土井千紘

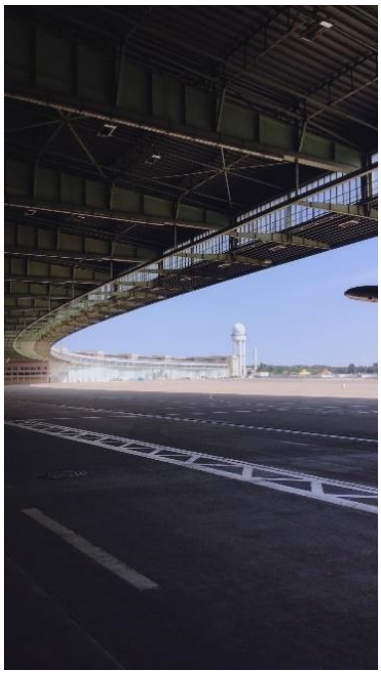
ホームステイ

ソフィアはドイツとイランのハーフで、すごく可愛い子でした。初めてメールをした時から、会ったこともないのに絶対いい子だ！って確信したほどです。だから、いざ初対面、というボウリングでも、ホームステイでもそんなに緊張はしませんでした。ソフィアがイベントに全て参加してくれて多く顔を合わせていたのもあります。また、家族のみんなは優しく、私をたくさんの場所に連れて行ってもらいました。また、こちらからも要望を伝え、結局行ったのは 1 日目にシュプレー川、美術館、大聖堂、公園で、2 日目にテンペルホフ空港、ソフィアのお父さんのカーペット屋さんとショッピングモール、3 日目にソフィアの学校です。普通に観光じゃできないようなことをたくさんしました。ドイツ人の習慣なんかも味わえましたし、だからホームステイはとびっきり楽しく、大切な経験になりました。いくつかそれを書きたいと思います。

まず、英語だけを使う毎日を初めて過ごしたことで、自分の未熟さを知りました。インターに少しの間通っていたので英語はできる方だと自負してましたが、ソフィアの方が英語が堪能だったので、私が言葉に詰まることが多かったです。少し悲しかったのは説明するために考えてる時に、気遣いからか「もういいよ、大丈夫」と言われてしまうことでしたが、そこは粘らねばと奮起し途中からは「いや！考えてるだけだから、ちょっと待って！」と言うことにしました。それがよかったかなと思います。英語を喋ることはあんまり抵抗感がないのですが、語彙力がないことを、想像力を働かせ、ジェスチャーや簡単な単語で説明しカバーする力が鍛えられたからです。ソフィアママはあまりでしたが、ソフィアのお兄さんはかなり英語が喋れたのでドイツ語でなくても英語でなんとか乗り切ることができました。それでも起きてから寝るまで英語づくしと言うのは意外に大変で、あやちゃんにベルリン大聖堂で会って思わず「母国語ってすごいね」と言ってしまったほどでした。それでも英語は、本来文化も言語も違うドイツ人と日本人の私達が、分かり合えるためにすごく大切なんだともわかったので、今は“冗談をもっと気軽に言えて語彙力も十分にあるレベル”まで引き上げるべく勉強を頑張っています。つまり、ホームステイはそう言った学習意欲を掻き立てるいい機会にもなりました。

また、ドイツの現役中学生の考え方や趣味に直接触れられたのは、とても面白かったです。ソフィアは Fridays for future という環境活動に参加していて、中学生でもデモに参加しているようでした。凄く驚き、同時に日本との意識の違いを見せつけられた気がしました。実際に使ったプラカードも見せてもらい、私も頭の中で何かしなきゃと思うだけでなく、少しでも行動を起こさなきゃと思いました。ちなみに私達が日本に帰ってきてから、さらに大きなデモがブランデンブルグ門の前であり（もちろんソフィアも参加したそうです）、それは LINE ニュースになるほどでした。何が凄いって、そのデモの参加者には未成年が多いということです。わたしもそのニュースを見て、“Climate Justice!”じゃないですけどすぐに何かしたくなり、今は学校の SDGs 同好会に在籍しています。このように、ソフィアの考え方は「私達が何かをしなくてはいけない」という方向であり、凄く感銘を受けました。また、ホームステイ中は美術館に行ったりドイツの建物をシュプレー川から見るクルージングにいかせてもらったりと、芸術についても意見を多く言い合いました。ベルリンの美術館の凄いところは、たくさん綺麗な絵が集まっているのに中高生はただ（確かそうです、記憶が曖昧ですみません）なことで、その分ソフィアもよく美術館に行くようでした。お気に入りの絵などを教えてもらい、凄く楽しかったです。川から建物を眺めるのも、ベルリンは昔と今が混ざり合っている都市なので、斬新なデザインの建

物から美術館島の荘厳な建物まで十分味わうことができました。あとは家に帰ってから、2 人とも洋楽が好きだったので YouTube を流しながら熱唱。部屋で歌ったり、ベランダでノリノリに踊ったりしました(笑)。めちゃくちゃ楽しかったし、日本の友達とは絶対しないような体験ができました。絶対、友達といきなりダンスし始めたりはしないと思います。でも恥ずかしがってここでノリに乗らないのはとてももったいないです。音楽だって洋楽はテンポを刻むものが多い理由が分かったりと、些細なことに文化の違いやその起因は隠れているとわたしは今回学びました。だから踊った時のビデオは大切にとってあります。夜にはアニメも一緒に見ました。つまり、全然違う土地に住んでいて全然違う生き方をしているのに、芸術、つまり美術、建築、音楽、アニメなどでは通じるものがある、それがどんなに嬉しいことか今回身に染みて感じました。



他にもドイツをたーくさん堪能しました！テンペルホフというヒトラーが作って結局あまり使われなかった空港に行き、歴史を含めたくさんガイドさんが語ってくださいました。ソフィアは「近所なのに全然知らなかったことがたくさんある！」と逆に驚いてるようで、それも新鮮で面白かったです。2 人して、「天井に観覧席！？空港だけでなくスタジアムにしたかったの！？」と驚く再発見ばかり。最終的にわたしはヒトラーの街づくりに興味を持ち（彼の恐ろしい理想がこんなに壮大なスケールで描かれていたとは知らなかったのです）ガイドさんに質問するほど、とてもためになりました。ドイツを深く知れたと同時に、興味の幅が広がりました。あとはテンペルホフには自転車を漕いで行っていたので、そのまま公園でアイスクリームを食べたり、ほかの公園を三つ回りました。どれも地域に密着していて、子供だけじゃなくわたしより少し年上、つまり高校生だったり大学生が友達とゆっくりしているんです。実際に、ドイツに行ったら公園を一つは訪れてほしいと思います。ソフィアは「ドイツの公園は素敵なものばっかりよ！」と案内してくれ、自転車でドイツの街を走りながらわたしは感慨にふけることができました。そういえば私も、ドイツに住んでた時公園が大好きだったなぁとか、自転車がドイツで大人も通勤に使う手段になってることを思い出したりなどなど…

なぜ日本は公園で球技が禁止されたり、走ることが禁止されたりするのだろうとふと疑問に思いました。ソフィアに日本の公園がどんなかを言ったら、「公園は誰のためなの？」と言われました。その通りです。少子高齢化が進んでいて、老人の運動不足のために公園が安全になるべきという考えなのでしょうか。つまり、子供の運動量の低下はあまり問題になっていないのだと思います。日光を浴びることは、ビタミン D を活性化させるのに必要だし、運動不足は将来的に骨粗しょう症を招きます。ではなぜ公園でできることが狭まってくるのでしょうか。それは、高齢者向けの政策をする政府が、若者の投票率の低さによって作り出されてるのかも知れません。ドイツの議員さんに別日にお話を伺ったところ、ドイツでは政治的関心が高く、若者にも浸透しているため投票率が 70%にもなるそうです。ただ投票率が原因だとは言いませんが、ソフィアと話してててどうしても気になったのは日本とドイツ（というより欧米？）の学生の意識の違いです。これについては、もっと調べてみたいという意欲がホームステイで芽生えました。

まだまだ語りきれませんが、ホームステイは私にたくさんいい影響を与えてくれたことがわかっていただけると思います。また、ソフィアに会って、もしくはドイツだけじゃなくどこか海外に行って、新たな発見をするのが楽しみです。

全体の感想

この派遣は、自分にとってすごく大切な経験になりました。全てが私の世界を広げ、広い視野を持たせてくれました。

今まで、同じ学校の人や歳が近い人しか仲良くしてこなかったので、まず一緒に行く仲間たちとの交流が新鮮なものでした。それまで私は小さな世界で全てを見ていたような気がします。しかし興味も様々、境遇も様々なみんなで 2 週間過ごせたのは（しかもその前に交流する機会が十分にあったとは言えない状況でした）自分の協調性だとか、新しい考え方だとか、足りなかったものに出会うことにつながりました。あとは、メンバーの人柄にも恵まれたと思います。私はとてもラッキーだなとベルリンで何度も感じました。そういう人たちと出会え、その後も交流が続くほど親睦が深まったのは貴重な繋がりだと思います。

また、さらにもっと大きなスケールで世界は広がりました。詳しくは報告書に書いたので読んで欲しいのですが、全てを目に収めたいと目を見開き、全てを吸収するべく耳をそば立て、積極的に質問したり話しかける。それにつきる 2 週間は、今まで一度も、そしてこれからも簡単には過ごせない時間だったと思います。もちろん疲れたり、日本語を恋しく思う時もありましたが、文化の違う人たちが英語で交流する、それを身をもって実感した日々でした。何物にも変えがたい経験です。

留学に比べれば少しの海外滞在にはなりましたが、それでも実りある夏休みを過ごせました。これからは春のベルリンの人たちの受け入れに向けて調整を進めつつ、オリンピック、パラリンピックもある影響で来日者も増えると思うので、自分から道案内やボランティアに参加したいと思います。そしてこれから先も今回味わった気持ちを忘れずグローバル社会で何ができるかつねに自分に問い続けていきたいです。

読んでいただきありがとうございました。是非、ホームステイ受け入れでも、実際に交換留学に応募してみるでも、なんでもいいのでこのプログラムに参加してみて下さい。

岸本彩

ホームステイ

私はホストファザーFred、ホストマザーBettina、ホストブラザーEmanuel そしてホストシスターRike の四人家族の家にホームステイをしました。8/24、ゴルミッツから帰った後、Rike と Bettina に迎えられ車で移動をしながら家に向かい、車中ではドイツに来てから一番記憶に残っていることは何か、どんなお土産を買ったかなどを話しました。彼女たちの家はベルリンから少し離れていたため、40 分ほど車に乗っていたのですが、そんな時間はあっという間に過ぎ去ったくらい、楽しい時間が過ごせました。

実をいうと、Rike の家でホームステイをする当日までホームステイが一番緊張したし、行きたくない、いやだ、と憂鬱に考える日もありました。なぜなら私は英語に対して苦手意識があり、日本語は無し、英語だけを話してコミュニケーションをとるなんて想像もつかなかったからです。ホームステイの期間は 4 日間、たったの 4 日間、されど 4 日間。絶対に無理!! と思い込んでいました。ですが、そんなネガティブな考えは一瞬でなくなるくらい、Rike と Bettina は私の話を熱心に聞いてくれて、逆に二人は私に話を振ってくれたため、少しだけ、英語で話す事の恐怖感が薄まりました。

家に着いたといわれ、車を降りると、まるでジブリ映画のアリエッティを彷彿させるくらい素敵な、真っ赤なレンガの壁に、高くそびえる煙突がある家が目に飛び込みました。

Bettina が夕飯の準備をする間、Rike に家の中を案内してもらう事になり、家の中に土足で入ろうとしたら「靴を脱いで」と言われました。私の勝手なイメージですが、海外は土足文化の印象であったため、靴を脱ぐというルールが彼らの家にあるのはどことなく日本を感じ、また少し恋しく思いました。その日の夜ご飯はファミリーの家にある大きな庭で Bettina お手製のミートスパゲッティを食べながら日本で買ってきたお土産を渡したり、明日明後日の計画をしました。

次の日の朝、起きて食卓に向かうとテーブルには恐らく 20 個はあるのではないかというくらい沢山のパンがありました。日本にはカレーパンやあんぱん等、パンの中にプラスワンで何か追加されているパンが多いですが、朝食として出してもらったパンはほぼ全て硬いロールパンでした。ですがそのまま食べるわけではありません。ベリージャムやチョコソース、ハムなどを乗せて食べるのですが、そのジャム類の中に、なんと日本でもおなじみの黒ゴマクリーム(日本語表記の)がありました。ドイツでは黒ゴマクリームがひそかなブームになっているらしいです。

朝食を食べ、まずはベルリン大聖堂に向かいました。元々私は宗教に興味をもっているので、日本の教会には一度行ったことがあるので

すが、ベルリン大聖堂の様に細部まで装飾にこだわり、大きなパイプオルガンがある教会は日本にはありません。教会の制作者の技術力、そして携わってきた人のキリスト教への献身的な姿勢にとても感動をしました。Rike のお母さんは教会で働いているというくらい彼らは熱心なキリスト教徒であったため教会内のステンドガラスの模様の意味、なぜ教会はこの様な作りなのかなど、日本では知ることができないような話をしてもらい、とても楽しい時間が過ごせました。

その後は Rike の友達と合流し、ブランデンブルク門前で行われたベルリンフィルハーモニーのコンサートを聴きに行きました。それぞれの楽器の音色も素晴らしかったのですが、私が一番印象に残っている事は演奏をしている人はもちろん聞いている人全員がとても幸せそうな顔でその音楽に身をゆだねていた事です。その瞬間を楽しみ、知らない人と共有をする、今思い返すと最近の日本でいえばラグビーW 杯に通ずるものがあるなと思います。

2 日目は Rike と彼女のお父さん Fred の三人でサンスーシー宮殿に向かいました。向かう道中の電車内で盛り上がったことなのですが、日本は禁止事項には×印を、いい事には〇印をつけますが、ドイツなどのヨーロッパやアメリカは意味が逆です。元々知ってはいたのですが、実際にルール事項の禁止欄に大きな〇がついているのを見ていると不思議に感じました。日本ではドイツと〇×の意味が逆なのだよ、と Rike と Fred にその事を伝えたところそのギャップに大変驚き、他にも、日本の電車はホームで待っているときに扉の位置がわかるマークがあるということ、ドイツの人は目的地の 2 駅前になったらすでに立って扉の前でスタンバイをしているけど日本ではぎりぎりまで座っている事等日本とドイツのギャップについて大変盛り上がりました。

その日の夜は家族全員で集まり、ファミリー全員が大好きなスペアリブのお店に連れていってもらいました。とてもおいしかったのですが、とにかく大きい。残念ながら食べきることができませんでした…。

その後は Rike と二人でドイツ生まれのキャラクター、スヌーフの映画を見ながら写真を見返して、あっという間に過ぎ去った三日間の思い出を語り合いました。初めてのホームステイは楽しい事ばかりでドイツの文化や国民性について沢山学ぶことができましたが、同時に悔しい思いもしました。それは英語を全く話すことができず、自分の言

いたい事を上手に伝えることができなかったと言う事です。Rike とは SNS 上で今でも連絡を取り合っているので、いつか個人的に彼女を私の家に招待したいです。私の 19 年間で一番濃い、一生忘れないであろう 3 日間になり、様々な経験をした Rike との 4 日間は私のアナザースカイとなりました。

全体の感想

“これが私のベルリンスカイ”

この派遣を通して体験した事は、当初の目的であった「この派遣で自分を知る」という目的を大きく達成する事に繋がったと思います。私にとって初ヨーロッパ、初ホームステイで、私の拙い英語で相手に意思を伝える事が出来るのか、新宿区民の代表として求められている事が実行できるのか、みんなと仲良くやっていけるのか等…。ベルリンに出国をする前までは、期待感、高揚感ももちろんありましたが正直に言うとこの様な不安感が私の心を占めていました。

ですが、オリバー、陽子さんを始めドイツの青少年のみんな、日本のメンバーに恵まれたため、その様な気持ちは一瞬で吹き飛びました。

私が体験した中で印象に残っている事は、ベルリンの駅のホームには、電車の乗り口の表示がないという事です。そんな事をここに書くの！？という感じですが、私にとってこの事はベルリンの良い意味での緩さ、そして日本の真面目さを改めて感じる瞬間になったので書かせてもらいました

ベルリンで出会った人々は私にとって忘れられない出会いであり、そして彼らと経験をした事は、知識だけでなく人間面でも成長をすることができる大きなきっかけとなりました。

ベルリンは私にとって日テレで紹介したい様なアナザースカイとなり、絶対にもう一度行きたい場所です。(写真のはがきはホストシスターの Rike が家で書き、さよならパーティーで渡してくれました、宝物です。)

合田摩弥

ホームステイ

○１日目

ゴルミッツから帰ってそのまま gesa(ゲーザ)とゲーザのお母さん Barbara（バーバラ）がホステルまで迎えに来てくれました。２人が私の荷物を持ってくれて、駅に向かっている時にユダヤ人のメモリアルホールを見つけました。もう行く時間がないかもしれない！と思いバーバラと一緒に２人でそのメモリアルホールを見学しました。まずメモリアルホールが地下にあるのが驚きでした。今までホロコーストのことは教科書の資料集でしかみたことなかったのですが、より詳しい写真や情報がホールには展示されていて、ナチスドイツが行ってきたむごさを目の当たりにしました。特に印象的だったのは、ユダヤ人たちの家族の写真が展示されていて、その家族がナチスドイツからの迫害をえてどのように家族編成が変わったかを説明していたことです。家族がどのようにバラバラになったかがわかり、改めてナチスの犯した悲惨さを知ることができました。

そのあとゲーザ達の家に着きました。ゲーザ達が住んでいる家は築 100 年の家でした。日本ではとても考えられません…。バーバラと日本では築 100 年の家なんてそうそうもないという話をしたらバーバラはとても驚いていました。私は専攻が建築ではないのでイメージですが、日本は災害が多いのですぐに家が破損してしまいやすいため、なかなか古い家がないのかなと思いました。

○２日目

この日は１日空いていたので私が前から行きたかったベルリン医療にゲーザとバーバラと行きました。バーバラはこういう血や人体、内臓を見るのが苦手らしく、ゲーザと２人で美術館を回りました。美術館にはとにかく展示されている品が多かったです。心臓カテーテルやペースメーカーが埋め込まれた心臓、肝肥大を起こした人の肝臓がすべてホルマリン漬けした状態で展示されていました。大学でホルマリン漬けされた臓器のスケッチをしたことはありましたが、それよりも圧倒的なサンプルの量に驚きました。

そのあとは美術館の周りをお散歩しました。途中でジェラート屋さんを見つけて、お休みがてらみんなで食べました。ゲーザもバーバラも、休まずひたすらに歩き続けるので健脚だなぁと１人で感心してしまいました。

右の写真はドイツの歩行補助具です。デザインがおしゃれでした。

○３日目

この日は朝からサンスーシに向かって３人でお出かけをしました。ですが、さすが世界遺産。予約をしないと、建物の中には入ることができませんでした。なので、庭をお散歩したり、予約がなくても入れる建物を見学したりしました。サンスーシはロココ様式で、派手というよりは落ち着いた印象を受けました。私はフランスのベルサイユ宮殿にいったことがありますが、あちらの豪華絢爛！バロック様式とはまた違った美しさに圧巻してしまいました。バーバラの作ったサンドイッチを食べて休憩を混ぜながらサンスーシを満喫しました。

家に帰ったあとは、お好み焼きをゲーザと一緒に作りました。私は大学の交換留学生のホストファミリーをした経験が何回かあります。タイからの留学生が以前トムヤムクンをふるまってくれた時にとてもうれしかったので、自分もホームステイをしたらなにか日本料理を一緒に作ってみたいと思っていました。そのため、お好み焼きをドイツで作るのは念願でした。ゲーザは去年日本に来ていて、その時にお好み焼きを食べたようで、味見をしてもらったときにとてもうれしそうな顔をしていました。３人で食べたお好み焼きは最高においしかったです。

全体の感想

“ちから”

この留学を通して学んだのはちから、です。力といったら物理的なパワーをイメージしますが、私は目には見えないちからについて学ぶことができました。

まずは、目に見えない、人と人とをつなぐ力です。今回のテーマはスポーツだったので、オリンピックスタジアムや地元のサッカーチームのグラウンドを訪問しました。スポーツは音楽と同様に、時や場所、そして相手を問わずに行うことができます。体を動かしたり相手と対戦したりすることで、その楽しみを知ったり、チーム内の絆も強くなります。スポーツの面白いところは、ルールさえ知っていれば言葉が通じずとも、仲間を作ることが容易だというところです。小学校、中学校と吹奏楽部に所属していた私は、何百年前の人が考えた曲を現代の私たちが演奏することの面白さがあると感じていました。今回の留学を通して、音楽と同様に、スポーツにも人と人を繋ぐ力があるのだと今回の留学で気づくことができました。

２つ目に私自身の伝えるちからについてです。今回私がこのプログラムに参加した理由は様々なバックグラウンドを持った人たちがどのようなものの捉え方をするのか、自分の視点と比較した時に共通点や相違点を見出すことで今後の学習に活かしていきたいと思ったからです。私は看護学部に在籍して、普段の授業はグループワークを同級生とすることが多いです。その時に互いの意見を聞く機会が多くありますが、その意見は看護師になりたい女子の意見であり、どこかみな似たような考えです。学年が上がるにつれ、徐々に物事を医療者の視点で見ている自分に気づき、将来１人の医療者として深みが持てるように、様々な視座をもちたいと思い申し込みをしました。英語も少しやってきたし、ドイツの青少年との交流はまあなんとかなるだろうと思っていましたが、自分が思っていたよりも同じ日本の青少年とどのようにかかわっていけばいいのかが戸惑いました。特に、私は最年長の１人ということもあり高校生と物事を決めていく際には普通に話していてもやはりどこか威圧的な発言になっていないかと気を付けながら話していました。今まで看護学部の実習で、たくさんの患者さんにあって会話をしてきましたが、自分よりみなさん年上ということもありとても話しやすかったです。この留学を通して、どのように話したら相手に伝わりやすいか、伝える相手のことを考えることができました。

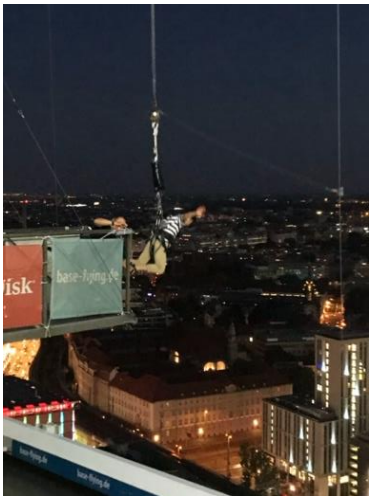
この留学を通して得た仲間を大切にし、学んだことを自分の将来に生かせるように、学び続けていきたいと思います。

佐藤奏

ホームステイ

私の受け入れをしてくれたホストファミリーは、Jimi(18 歳)と彼の Girl Friend である Jada(18 歳)、お母さんの Madeleine、義父の Uwe、そして犬のクッキーとタイガーです。

事前にメールをした際、「パグを 2 匹飼っている・Jimi も音楽が大好き・90 年代野外音楽フェスティバルに行く」と聞いていたので、小学生からトランペットをやっていて犬も飼っている私は、ホームステイがとても楽しみで仕方ありませんでした。



さて、ホームステイ 1 日目は、Jimi・Jada と合流してお昼過ぎのホステルから出発です。

イーストサイドギャラリーでベルリンの壁を見てから近くの川で談笑し、アレクサンダー広場でバンジージャンプをしました。バンジージャンプをする気は毛頭無かったのですが、Jimi に「人生は一度きり」と勇気づけられ挑戦することに！人生初、ドイツの夜景にバンジーという、とても貴重な体験ができました。その後、ブランデンブルグ門や国会議事堂、シンティ・ロマの記念碑と言った観光名所をまわり、Paul-lobe Haus という議員会館に投映されるドイツ政治の歴史（？）を鑑賞して帰路に就きました。

家でピザを食べている時に「ご飯を残すと次の日は雨」という言い伝えを教えてもらい、ドイツにおけるリサイクル精神の起源ではないかと思いました。

2 日目は待ちに待った野外音楽フェスティバルです。

跳んだり踊ったりそれはもう本当に楽しかったのですが、終了時刻がなんと 22 時！13 時開始だったので約 9 時間飛び跳ねていたことになります。日が落ちるのが遅いためか、不思議とそこまで長くは感じませんでした。

ケバブ屋さんを二軒はしごして JAZZ BAR に向かったところ、惜しくも 24 時閉店。夜のベルリンをお散歩することにしました。月がとてもきれいだったのを覚えています。この日、初めてのんびりと月を見た気がして、1 週間ゆっくりと月を見る余裕すら無かったことに気付かされました。

その後、ポツダム広場とホロコースト記念碑を訪れ、夜中の 4 時でも地下鉄が動いていることにとても驚きました。

3日目はベルリン市内のノイヘ・ヴァッヘという慰霊館やフンボルト大学のフリーマーケット、ベルリン大聖堂を見学して、その後、湖へ行きました。雲一つ無いベルリンの空はとても綺麗で、大聖堂の屋上からの景色は本当に素晴らしいものでした。

景色を堪能した後は、川と間違えるほどに大きな湖へ行き、飲んだり食べたり泳いだり、とてもまったりした時間を過ごしました。意外と水が冷たくて後半は飲み食いがメインでした。

ホームステイ最後の夜はBBQで締め括ります。心地よい風に吹かれながら美味しいご飯を食べ、日が落ちていくのを見ながら思い出話に浸り、「あなたはドイツファミリーよ」と言ってもらえた時は本当に嬉しかったです。

↑大学で食べたアイス

最終日はホステルに帰らなければならないので、朝から大忙し。最後のイベントはJimiの大学見学でした。かつて農家だった建物を校舎にしているキャンパスで、外見と内装が異なるtheドイツ文化を感じることのできる場所でした。

ホステルに向かうと、なんと！集合時間に余裕があります。別れたくなさすぎた私たちは近くの楽器屋さんに向かい、試奏という名目でプチセッションをして4日間を締めくくりました。

振り返ってみると、私のホームステイはいつでも音楽に囲まれていました。家にいる時はもちろん、車での移動中や電車の中、散歩をしている時でさえ、叩くものがあればリズムを刻み、音が聞こえればメロディを即興してお互いの音楽を共有しました。ノンバーバルコミュニケーションの延長線上かもしれませんが、音を楽しむのは世界共通だと言うことに気付かされました。このことを教えてくれたJimiの家族に出会えたことを本当に嬉しく思います。彼らとまたどこかで会えますように！

Thank You! See you again;)

Danke schön!

全体の感想

驚きと感動の毎日で、本当にあっという間に終わってしまった2週間。自分が外国にいることを忘れてしまうくらいにとても楽しく、たくさんのことを経験しました。

電車に乗ればホストブラザーは見ず知らずの人に話しかけ、話疲れたと思いきや二人用の椅子を使って眠りだす始末。自転車がそのまま乗車できる仕組みや改札のない駅、夜中に受けた電車チケットの抜き打ちチェック。改札がないため、スタンプを押しているかどうかとても不安になりました。

ご飯を食べに行くと1人分の量が多く、日本で言う2人分以上が普通に出てきて、とにかくお肉が分厚い！マヨネーズやケチャップがたくさんかかったフライドポテトやホットドッグ。ビュッフェに並ぶハムの種類の多さには驚きました。スーパーでの買い物は合計金額に目を疑いました。

街を歩くと歴史を感じる建物がたくさんあり、近代建築の隣に建っていても違和感を感じないのが不思議でそれがまた素敵でもありました。中に入ってみるとこれまた不思議、蛍光灯が使われていて現代を感じます。歩道は車道のように広く、壁の落書きは芸術作品のように美しかったです。道路脇にあるリサイクルボックスや夜に見た大きなネズミ、雲ひとつない空はどれも僕にとって新鮮なものでした。

ここに書ききれないほどまだまだたくさん見て聞いて体験してきましたが、2週間と言う短い間にこれだけの経験をさせてくださった新宿未来創造財団の方々、私たちを暖かく迎えて頂いたオリバー、アニャ、ノーベルト、ホストファミリー、現地プログラムでサポートをしてくれたミッテ区青少年のみんな、そして新宿区の青少年への感謝でいっぱいです。素敵な時間をありがとうございました。

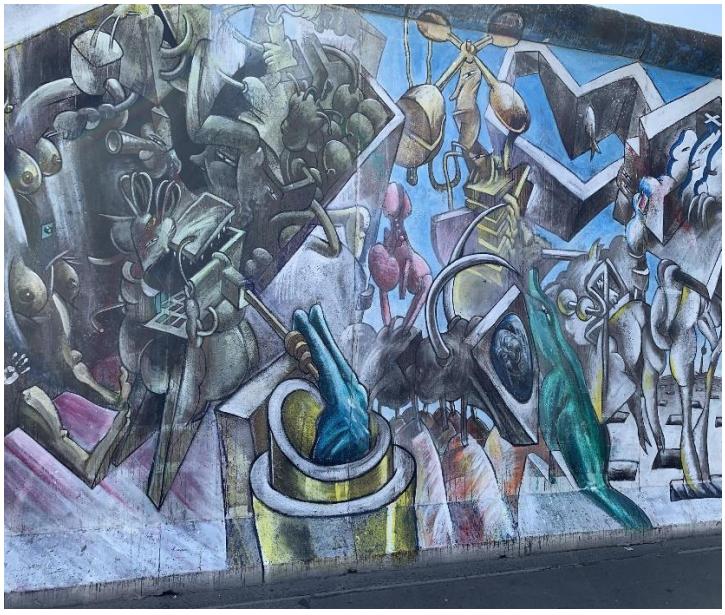
瀬端 亨介

ホームステイ

私はホストファミリーの16歳ローマン（Roman）の家にホームステイしました。ローマンは外で遊ぶのが大好きで特にスケートボードが好きなとてもエネルギッシュな人です。私自身海外やホームステイが初めてだったので不安でしたが、ローマンとホストマザーの2人がとても優しく、いつのまにか不安は消え去っていました。1日目の夜、軽く夕食を済ませるとローマンと一緒にパーティーに行くことになりました。会場に着くとローマンの友達らしき人がたくさんおり、ノリノリの音楽をかけながらみんなで盛り上がりました。帰り際に小腹が空いたのでケバブを食べるということになりました。

忘れることができないほど美味しかったです。

2日目は昼過ぎにベルリンの壁にあるアートを見に行きました、写真で見るよりとても大きく、とても迫力がありました。その後服を買いにアウトレットに向かう途中、道路でパレードがやっており規模感や雰囲気など日本と大きく差があり見ていてとても楽しかったです。帰る途中お金をプレスして絵柄を入れるという面白そうなものをみつけたのでやってみました。



良いお土産になりました。

夜にはBerlin Central Station に行き、綺麗な川沿いを散歩した後ベルリンの壁崩壊30周年記念のイルミネーションを見て、とてもホッコリしました。

これにて2日間の短いホームステイが終わってしまいました。

全体の感想

“出会い”

今回の目標は、現地の人と多くコミュニケーションとることと、楽しむことでした。青少年との交流は楽しみでもあり不安な部分も多かったのですが、多くの人とコミュニケーションをすることができ、ローマン(Roman)とも帰国して4ヶ月経った今でも連絡を取り合うほど仲良くなれました。

とても充実した派遣になりました、きっと一生忘れることはないと思います！出会いを大切にしたいと思える14日間になりました。本当に皆さんありがとうございました！

田嶋莉大

ホームステイ

今回、私は初めて海外に行きました。その初めての海外でのホームステイはとてもラッキーだと思います。なぜなら、最初は訳も分からない外国でだらだら過ごすより、地元の人のオススメの場所など、自分と同じ年代の人と関わることで異文化について真剣に考えたりすることができるからです。

私が今回ホームステイでお世話になった家族は 4 人家族（お父さん、お母さん、お兄ちゃん、弟）でした。とても仲が良く笑いが絶えない家族でした。当然、ホストファミリーにはすぐ溶け込み、言語の壁をぶち破ってドイツの有名な食べ物や料理などを教えてもらいました。弟のルビスくんのサッカーの試合なども観ました。やはりサッカー国、レベルが高い！ルビスはゴールキーパーとして出場していました、かっこいい！

その後はみんなで湖に行き、ゆったり過ごしました。そんなこんなしているうちに、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

このホームステイで 1 番感じたことは家族愛だと言い切れます。全員お母さんを愛している当たり前の光景に、感動してしまいました。自分も家族を大切にしようと改めて思いました。またドイツへ行ったときには必ずファミリーに会いたいです！

全体の感想

私は、このドイツの派遣で学べたことがたくさんありました。そして、学んだことだけではなく楽しいことなどもあってとても充実した時間を過ごすことができました。

この派遣で 1 番強く思ったことはやはり、「時間厳守」ということです。一見簡単そうに見えることですが、12 人もいると誰かが遅れたり時間の伝達ミスがあり大変でした。そういうときは大学生たちが注意してくれて本当に助かりました。

このような失敗もありましたが、もちろん楽しいこともたくさんありました。ドイツ料理や博物館などをみんなと一緒にまわっているときはとても楽しかったし、なにより普段関わりのない大学生に色々なことを聞けて良い経験になりました。ドイツから帰ってきた後も定期的にご飯などに行きたいです。

田畑美咲

ホームステイ＆全体の感想

☆行動の流れ

・１日目

シスターと合流→帰宅→Werk9→バブルティー(タピオカ)ショップ→帰宅

(→軽食→お土産などプレゼント交換→シャワー→就寝)

・２日目

(朝食→出発→)

Berliner Unterwelten(ベルリン地下社会博物館)→マクドナルド→TV 塔前広場

→スーパーマーケット→帰宅→ガーデン→食事→帰宅

(→シャワー→就寝)

・3 日目

(朝食→出発)

Deutsch-Russisches Museum (ベルリン＝カールスホルスト・ドイツ＝ロシア博物館)→Döner kebap (ケバブ)を購入→帰宅→食事→Rosengarten im Treptower Park(公園)

(→シスターとアニメ鑑賞→シャワー→就寝)

☆ホームステイへの不安

・なかなか会えない

顔合わせの日、私はとても緊張していました。ホストファミリーと会うのはその日が初めてだったからです。私のホストシスターは私たちの滞在中も学校があったため、あまりプログラムに参加できなかったのです。今回のプログラムの中で私のホストシスターが参加できたのは、最初の顔合わせと最後のさよならパーティーのみでした。

・なかなか連絡が取れない

緊張していた理由はもう一つあります。私は、ドイツに行く前、ホストシスターとのコミュニケーションがあまりとれませんでした。筆不精なシスターから、出国前、私に届いたメールはわずか一通でした。

☆言語の壁

・英語がわからない

顔合わせの際、私は語学力に不安があり、とても緊張していました。シスターも私と会うことにとても緊張していて、お互い会話よりも顔を見合わせて照れて笑うことのほうが多かったです。

しかし、それと同時に、“言葉がわからない”ことがそのまま会話のネタになると気づいたのもこの時でした。お互いが知っている相手の母国語の挨拶や単語を言ってみたり、「What’s this? （※「これはドイツ語でなんて言うの？」すら英語で言えませんでした(笑)）を連発してドイツ語の単語をメモしたりと、私にとって、“言葉がわからない”ことは、緊張して話題が出てこないときにもってこいのネタでした(笑)。

・オーラルコミュニケーションが取れない

また、私はこの時に初めて知ったのですが、ホストマザーは英語を話すことができませんでした。さらに、彼女は元々ロシアの出身で、ドイツ人との結婚を機にドイツに移住したため、ドイツ語のネイティブスピーカーでもありませんでした。私が話す、途切れ途切れの英単語も通じなかったため、ホストマザーとのコミュニケーションには特に苦労しました。

私がマザーと話すときは、

① シスターを介して話す

② マザーがジェスチャーと共にゆっくりドイツ語で話してくれるのを頑張って理解しようとする

③ オンライン翻訳機能に頼る

のどれかでした。

しかし、これらすべてに難点がありました。

①は、私がシスターの英語をなかなか聞き取れないことが何度もありました。また、当たり前ですが、シスターがいないところでは使えません。

②は、私はドイツ語が分からないため、ほとんど理解できませんでした。ただ、マザーの話すドイツ語の中に英単語に似たものが混じると、私がそれをリピートし、少しずつ話が進む、といった運要素の強いコミュニケーションでした。

③は、①や②でどうしても話が進まない時や、私が代替表現が思い浮かばなかった時の最終手段として用いましたが、スマートフォンを操作している間は会話が止まってしまうので、できる限り避けた方法でした。

・全然言葉が通じない中で私が考えたこと

シスターがいないところで私とマザーが会話するのはとても困難でしたが、それはマザーだけではありませんでした。

ホームステイの間、シスター以外に英語が話せる人はほとんどおらず、ファザーやガーデンにいたドイツ人の方々は、完全にドイツ語で私に接していました。これには、私も少し驚きました。

しかし、私にとって、これはありがたいことでもありました。どんなに知らない言語でも、それこそ最終手段として翻訳機能に頼れば少しずつ理解することは可能です。日本でたまに聞くように、話しかけられた時に「Sorry, I can't speak English』と言って去るよりは、自分の母国語でもいいからコミュニケーションを取ろうとすべきだ、と思うのです。私は、彼らが『ドイツ語が分からないからこの子とは話せないな』と諦めるのではなく、英語が全く分からなくても目を見て私とコミュニケーションをとろうとしてくれたその姿勢が嬉しかったです。

もちろん、語学ができるに越したことはありません。私自身、今回の派遣を通じて語学力が足りず楽しみ切れていないように感じることが多々あり、自分の至らなさを痛感しました。

・後悔の話

ホームステイ 2 日目、私はマザーに頼んで Berliner Unterwelten （ベルリン地下社会博物館）へ連れて行ってもらいました。ここは、ガイド同行型のツアーでしか中に入ることはできないのですが、私はドイツ語が、マザーは英語が、それぞれ理解できないため、中に入ることを諦めました。その代わりに、パネルのみの展示室へ行くことを、スタッフの方から勧められました。

シスターはその話を英訳してくれましたが、私はすべてを聞き取ることができず、“代わりのどこかに行く”ことは理解できたものの、“パネルだけの展示室”に行くことが理解できていませんでした。そのため、私は了承して中に入ったものの、文字ばかりの展示物にがっかりすることになり、ドイツ語の下に小さく書いてある英訳を読み続ける集中力も持たず、さらに撮影禁止のため写真を残すこともできず、こんなことなら行きたいなんて言わなきゃよかった…と思う始末。

今思うと、シスターは入る前に英訳するだけではなく「それで本当に大丈夫？」と聞いてくれたと思うのですが、ほとんど聞き取れたと思い了承したのは私です。ツアーに行けないのは仕方がないですが、あの時私がちゃんと理解できるまで聞き直して「それならほかの所に行きたい！」と意思表示できていれば…という後悔をしてしまいます。

・自分にがっかりしたこと

私は、「高校受験前も大学受験前もあれだけ勉強してきたし、今も大学で勉強しているし！」「わからない単語は辞書で調べるし、読めないものはないはず！」などと高を括り、リスニングやスピーキングには自信がないものの、リーディングには困らないと思っていました。実際、ドイツに到着してからも、苦手な英語には助けられることが多かったのです。例えば、レストランのメニューに英語があると理解できるし、注文ができます。また、製品名が英語だと、それが何なのかサッと把握できます。

しかし、前述のように、大変なのは博物館に行ったときでした。私は「本を読むのには苦労するけど、ドイツでは英語の本を読むことはないし大丈夫！」と思っていましたが、私にとって、歴史博物館にある膨大な量の展示物の説明文は、読書に相当するものでした。

2 日目 Berliner Unterwelten の展示室のパネルを読むのに苦戦したことは前述の通りですが、3 日目に行った Deutsch-Russisches Museum（ベルリン＝カールスホルスト・ドイツ＝ロシア博物館）でもとても苦労しました。こちらは、戦時中実際に使われていたものや、そのレプリカ、写真など、ありとあらゆる展示物があり、視覚情報が多かったのでとても楽しむことができました。滞在中に巡った場所の中で、一番印象に残っていると言っても過言ではないです。しかし、本当に、説明文を読むのに苦労しました。日本語のようにサラッと流し読みしただけでは全然意味が入ってこないので、じっと見ているうちに目と頭が疲れてしまい、最終的には、何度も何度も同じ文を読まないと理解できませんでした。一個一個の文の意味は理解できるはずなのに、集中力が持たずに理解できない自分をもどかしく思いました。

☆楽しかったこと・嬉しかったこと

・ホストファミリーへの愛

まず、私は私のホストファミリーのことが大好きです。ここまで、散々会えないだの返信が来ないだの言葉が通じないだのと述べましたが、全ては彼女たちのことが大好きだからです。だから、もっと話したかったし、もっと楽しめたのではないかと後悔が残っています。とても素敵な家族で、このホームステイは、今までで一番、他人を本当の家族だと思えた経験でした。いい意味で“お邪魔している”感のない生活を送ることができました。

さよならパーティーの日、ホストマザーが通訳の陽子さんに「私たちの家に来る日本人を美咲にしてくれてありがとう。本当にいい子だった」ということ伝えていたと聞きました。私が彼女たちのことを好きなのと同様に私も愛されていたのだと、嬉しく思います。

シスターはギターと歌が得意で、可愛らしく優しい女の子です。いつも私のことを気にかけてくれました。また、日本のアニメや漫画が大好きで、最終日はなんと日本語でセーラームーン(シスター私物の DVDBOX！)を一緒に見ました。また、なんと、飼い犬のラッフィーは漫画『ONE PIECE』の主人公ルフィーからとって命名したというのですから、そのオタク度合は相当のもの(笑)。一緒に写真を撮ろうとするとすぐに爆笑してしまうお茶目な面も持ち合わせています。

マザーは、美人で料理がうまくて、とてもかっこいい女性です。言葉は通じないけれど、私に何か不自由なことがないか、いつも気にかけてくれました。ロシア出身の方なので、家庭ではロシア料理を作ってくれました。私が気に入った料理を包んでさよならパーティーに持ってきてくれたことが本当に嬉しかったです。私の趣味が編み物だと知ると、かぎ針と毛糸、可愛らしい人形型のリリアンをプレゼントしてくれました。

シスターは 4 月に日本へ来る予定なのでまた会えるのが楽しみです。また、難しいことだとは思うのですが、マザーにも何らかの形でまた会えることを切望しています。

・美味しかったもの

〇ホストマザーの手料理
(クレープ生地に、鶏ひき肉と炒り卵、
イタリアンパセリの炒め物が包まれたもの)

〇Döner kebap(ケバブ)
(とにかく大きい！生地が分厚い)

〇フローズンヨーグルト
(川辺の屋台で。
トッピング３種選べる)

〇ガーデンの屋台で食べた
メキシカンフード
(サワークリームがおいしい！)

〇マックフルーリー
(Chupa Chups
with マンゴーソース)

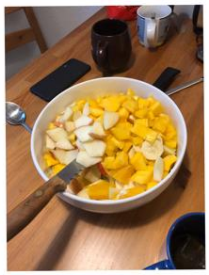
長田　明香里

ホームステイ

　ホストシスターはパオラで 14 歳と年下の女の子でした。彼女は音楽が大好きでとても可愛らしい子です。ホームステイが始まる前はあまり連絡が取れなかったのでどんな顔なのか、どんな食べ物が好きかなどは知りませんでした。ホームステイを経験した友達から事前に連絡を取っていたからホームステイを楽しめた、安心してできたなどのアドバイスを貰っていたのでホームステイがとても不安でした。ベルクノインデで対面の時にパオラとパオラのお父さん、トーマスと会うことが出来ました。お父さんはメガネの修理をする仕事をして、とても背が高かったです。どんな学校生活を送っているのか、どんな勉強をしているのかなどを話すことが出来ました。

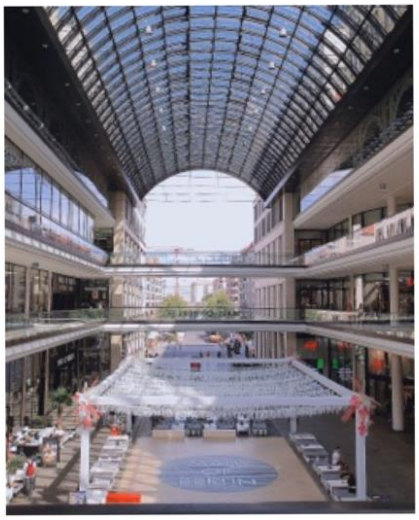
1 日目

　ゴルミッツから帰ってきた日、パオラの彼氏のデニスに会いました。その後、家に行って、家でフルーツボールをパオラ、トーマス、デニス、私の 4 人で作って食べました。日本にはない種類のメロンがあってとても美味しかったです。その日は帰ってくるのが遅かったということもあり、そのまま寝ました。



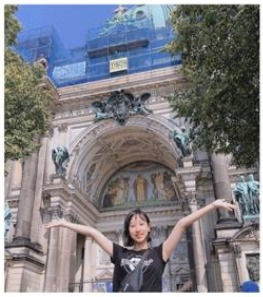
2 日目

　パオラ、デニス、私の 3 人で Mall of Berlin というベルリンの中でも大きなショッピングモールに行きました。そこでは家族のお土産を買いました。私がこんな感じのものを買いたいと 2 人に話すとこれがいいんじゃない？いやこっちもいいよというように色んなものをおすすめしてくれました。とても優しいふたりのおかげで、両親にはコップを、弟にはバックを買うことが出来ました。ショッピングモールに行った後に、公園に行きました。そこの公園ではフェスが行われていて多くの人がいました。フェスが行われていないところではピクニックを楽しむ人、日光浴をしている人など様々な人がいました。



3日目

パオラ、トーマス、デニス、私の４人でテレビ塔に登りました。これまでの行程でテレビ塔に登れなかった話をしたら、登りに行こうとパオラが考案してくれました。テレビ塔から見る景色は 2 日目のビルから見た景色より、ベルリンの街並みをみることができました。なんでこんな景色なのか、あれはなんなのか気になったことはとにかく質問してコミュニケーションをとりました。そこでここに行きたい！といってベルリン大聖堂に行きました。ベルリン大聖堂は想像より古く、歴史がある建物でした。建物を見れば見るほど歴史を感じて、とても印象に残っています。ベルリン大聖堂に行った後にベルリンの壁を見に行きました。私はそれまでベルリンの壁はベルリン市の中の一部にしかないと思っていました。でも、実際はベルリン市内のあちこちに壁はありました。私が見に行った壁は公園の中にある壁でとてもカラフルで、その壁にまた新しい絵を書いている人もいました。ベルリンの壁のデザインは日々変わっていくんだなと思いました。



私は最初はホームステイがとても嫌でした。なぜなら、英語が全く喋れないからです。そもそも英語は受験で使う教科の１つとしてしか思っていませんでした。それに学校の授業でもあまり話さないし、翻訳機があるから日本語だけを喋っていればいいと思っていたからです。でも今回のホームステイを通して英語は自分で話すことに意味があるという考えに変わりました。自分で言うことによってニュアンスが相手に伝わりやすかったり、翻訳機を使うと生じるタイムラグがなく伝わったりします。そのようなことを身をもって感じることが出来ました。今後はただの勉強と思って英語を学ぶのではなく、話すために学ぼうと思います。

全体の感想

今回のベルリン研修を通して私は２つのことを学びました。１つ目は日本とドイツの街の作り、建物の様子は違うということ、２つ目は英語を話せたら世界が広がるということです。私は建築を学んでいます。今回の研修を応募したきっかけもヨーロッパの建築を実際見てみたい、日本とヨーロッパの違いを味わいたいというものでした。なので、学んだことの１つ目は建築関係のものでした。実際に自分自身の目で見てみて、日本と違うなと思ったことは沢山あります。例えば、道の広さ、木の多さ、高さ、建物の造りなどなど。ここで感じられた相違点を今後の自分のアイディアに付け加えていきたいと思います。２つ目は正直意外な学びでした。元々英語が苦手だったので、英語は全て翻訳機、英語ができる人に頼ればいいと思っていました。自分な得意なことを伸ばして、自分の苦手なものは得意な人に任せるという考えでした。しかし、今回の研修でその考えが変わりました。英語は言語です。自分で言うことにとても意味がある、自分で言うことでより伝わり、考えが深まり自分を高めてくれるものだと変わりました。これからは英語を単なる１つの教科であるという認識ではなく、人とのコミュニケーションにおけるツールであると考え、勉強していきたいと思います。今回のベルリン研修で私は変わることができました。今はこの変化はほんの小さなことかもしれないけど、大学生になったり大人になったりと成長する私にとって大きな変化になることでしょう。

新倉有紗

ホームステイ

私のホストは同い年(22 歳)のサラです。今回はサラが普段暮らしているベルリン市内のルームシェアのフラットに滞在させていただきました。様々な国出身の個性的なフラットメイトが 5 人いて、それぞれ部屋はありますが、リビングで談笑していたりと非常に仲が良いことが伝わってきます。サラと私の会話はずっと英語で、彼女がネイティブのような英語を話すのはこのようなインターナショナルな環境で過ごしているからなのかと納得しました。キッチンからベランダまで緑で溢れ、彼女たちが自然を愛していることがわかります。フラットの家賃の一部が近郊のファームに寄附され、ファームから週 1 で新鮮な野菜が届くそうです。地域周辺の農家を支持する面白い方法だなと思います。ベルリン市民はオーガニック志向も高いので、このような制度を取り入れやすいのかと考えていました。

サラと合流してからまず自転車で向かったのはテンペルホーフ空港公園です。ちなみに、私たちの移動はほぼ自転車です。というのも、私が「エコ」なベルリンの暮らしに興味があると事前に伝えていたのと、幸運にもサラが 2 台自転車を持っていたからです。アンペルマンとして歩行者信号が有名なのでそちらに注目しがちですが、いざ自転車で走ってみると自転車マークの信号があることを発見しました。また、自転車専用レーンの道幅も広く、非常に走りやすかったです。テンペルホーフ空港に到着し、その広大さに非常に驚きました。名前からわかる通り、もともとは空港だった場所が現在は公園として利用されています。芝生でバーベキューをする人、区切られたスペースでガーデニングする人など多くの人で賑わっていました。空港時代の滑走路や施設も残っています。施設は難民の人々の住まいにもなっているようです。サラの友達のリイナとペトラとも合流し（みんなベルリン出身なのに英語で会話してくれて感謝)、最近始めたらしいスケートボードを一緒に練習しました。一体誰が空港だった場所をそのまま公園にしてしまおうと考えられるのでしょうか。滑走路は私たちのようにスケートボードを楽しむ人や自転車で散歩をしている人にうってつけであり、とても上手な活用方法だと思いました。0 にしてから新たな物を 1 から作り出さずとも、人々に愛される空間を作ることができるのだと実感しました。

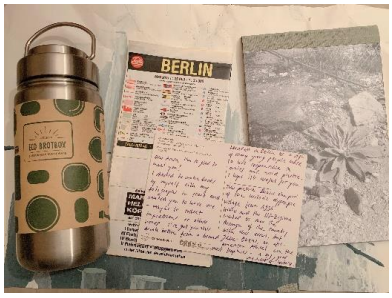
次の日は、ベルリン市内にあるサラの実家を訪ねました。ご両親が温かく迎えて下さり、緊張が解けました。サラは昨夜から体調が良くなかったので少し休んでいてもらい、私はご両親と共に近くの公園で開催される朝市に向かいました。ガイドブックに載っていない比較的小さい規模のマーケットだったので、観光客ではなく、地元の人で盛り上がっていました。実際にご両親も毎週買い物をしに来ているようです。昨今、日本や海外でも多くのマルシェが開かれていていますが、今回とても印象に残ったのはポテト専門のお店です。非常にドイツらしいですね(笑)

帰宅後は朝買った食材で作ったホストマザーの手料理をいただき、エネルギーチャージ。その後は、シュプレー川のクルーズに連れて行ってくださいました。新旧の建造物を見ながら、東から西へと流れていきました。西側で船を降りた後は、川岸でマザー手作りのケーキをいただきながらお話をして、ゆっくり過ぎる時間を楽しみました。周りを見渡すと、水着で日光浴、ピクニックをしている人が多く、ベルリーナーの休日の過ごし方を体感できたように思います。

ご両親とお別れし、ルードルフ＝ヴィルデ・パークに向かいました。小さな池のある美しい公園なのですが、なんと公園内に駅があり、地下鉄なのに電車が地上に出てきてしまう珍しいスポットなのです。喜んで写真を撮っていると、隣で切り株に絵を描いている女性を発見しました。話しかけてみると、大きくなりすぎたため切られてしまった木に感謝の気持ちを込めて描いていると言っていました。後に体験するＴシャツ作りで触れた感性と似たものをここで感じました。「好きなように描いていいよ」と言われ、どうしようかと戸惑う私とは対照的に、サラは迷いなく筆を執っていたのが面白かったです。

日曜日は蚤の市に行きました。服や骨董品、家具などの中古のみならず、ガラスで作ったストローなど環境に配慮した新しい商品も販売していて賑やかでした。その後はサラが通うコミュニティーガーデンを訪れました。ボランティアの人々が様々な植物等を育て、持続可能を体現しているようなコミュニティーでした。また、多くの移民の方も集まっていました。彼らのワークショップに参加し指輪を作成しながら、移民の現状や政府の課題の話を聞いていました。移民を受け入れる上で、彼らの生の声を聞く姿勢の重要性は将来の日本にもかなり大きな課題となっていくであろうと思います。いい経験ができました。

楽しい週末はあっという間に過ぎました。最後に、最後に、サラからプレゼントをもらいました。手紙・水筒・手作りのメモ帳（表紙はサラが撮った写真で緑と石がミックスしたベルリンを表現したらしい）・この週末の私たちの足跡をマークしたベルリンの地図、それを彼女が書いた絵でラッピングしてくれていました。心のこもったギフトってこんなにも人を幸せにするんですね。アーティスティックな彼女らしいセレクトでとても嬉しかったです。充実した週末を送ることが出来たのは間違いなくサラのおかげです。Sarah, Danke!!



全体の感想

“伝えることの大切さ”

今回、私がこの派遣に応募した理由は、ドイツが環境先進都市とされる所以を知りたかったからです。ホストのサラ、通訳の陽子さん、Werk9 の方々の計らいで、ドイツの環境問題への意識や実際にどのようにして生活に取り入れているのか（例えばごみの捨て方や Bio 食材の身近さ）を学ぶことができました。本当に感謝しています。

しかし、この派遣でドイツの環境問題に関する知識だけではなく、むしろそれ以上に大切なことに気づくことができました。それは「コミュニケーションの大切さ」です。青少年派遣団員の多くは高校生であり、普段私は高校生との交流が全くありません。正直、最初はどのように接していいのか分かりませんでした。どちらかというと、高校生に気を遣わせてしまったときもあったと思います。しかし徐々にみんなの長短が見えてきて、それぞれの個性を出せるチームを作りたいと最年長者の一人として思っていました。今回の派遣では、その思いを口に出し、相手に「伝える」努力が足りなかったと反省しています。もう一人の年長者、まやちゃんや他の大学生がどのように周りと接しているのかを見ていて、どのように伝えたら相手に「伝わる」のかを考えるきっかけになりました。一方的に自分の意見や感情を伝えるだけではコミュニケーションは成り立たず、相手のバックグラウンドや状況を考えた上での「相手に伝わる」工夫が、コミュニケーションを構築させるのだと気づかせてくれました。普段関わらない人と交流する時間は、新たな発見をさせてくれたり、バイアスに気づかせてくれる大切な瞬間ですね。これからもそのようなときを大切にしていきたいです。

ドイツ人との交流のみならず、日本人青少年との団体行動という私にとって初めての経験をさせていただく機会をつくって下さった新宿区の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

西島康

ホームステイ

私を受け入れて下さったホストファミリーは異文化に理解のある、知的で素晴らしいご家族でした。このご一家と国際交流ができたお蔭で学んだことは数知れません。私は本当にしあわせ者です。

ホストシスターのハンナ、お兄さんのティル、お母さんのジャネット、お父さんのステファンは、対面会に４人そろって私に会いに来てくださり大歓迎してくれました。こんなに素敵な家族ですから、打ち解けるまで時間を要しませんでした。ハンナ達の住む家は静かな住宅街にあります。私が到着した日の晩はホームパーティが開かれました。ハンナの親友、ティルの幼馴染やガールフレンドなど、親しい人達が大勢集まりました。BBQ をし、さらにキャンプファイヤーを囲んで遅い時間まで歓談しました。色々なことを話し哲学まで語り合ったりする場に居合わせて、とてもよい時間を過ごすことができました。家族や友人達と過ごす時間を大切にするドイツ人の文化を肌で感じました。色々と話をする中で人々の考え方の中に大陸的な大らかさを感じ、居心地良さすらありました。

ところで、パーティでの食べ物は全てジャネットの手作りだと聞いてあまりの素晴らしさに感動してしまいました。「どんなに忙しい日々を送っていても、食べるものは手づくりで美味しい、身体によいものを」。ジャネットの様に豊かな心をもって暮らしたいものです。

日曜日にドレスデンを訪れました。ベルリンからは少々距離がありますが、「是非ドレスデンの街を見たい」という私の願いを叶えようと、長距離運転をして連れて行って下さいました。ドレスデンで古き美しき教会、建築物の歴史的背景、宗教と芸術について、ジャネットとステファンが詳細に至って説明してくださいました。とても面白かったです。ほぼしゃべり通しでしたから大変だったのではと思います。まさに、学芸員と廻る充実の歴史ツアー、という贅沢ぶりでした。ハンナ、ジャネット、ステファンと一緒にこの街を歩いたお陰で、たくさんの発見がありました。ご厚意に感謝しかありません。

陶磁器の工場も見学しました。私は、美しい磁器が好きなので、マイセン地区の工場では我を忘れて熱中しすぎてしまいました。実際に職人さんが作品を作る工程を見ることができたのです。独特の乳白色が美しく、

この地方は有田ともまた違った良い成分の土に恵まれたのだとわかりました。ドレスデンにティルは行かなかったのですかって？そうなのです、再び長時間運転をしてやっとのことで帰宅した時、ティルがスパゲッティを準備してくれていたのです。計画して物事をスムーズに運ぶのはドイツ人らしいことでしょう。手作りのラグーソースにチーズを削って、心あたたまる夕ご飯をいただきました。そしてティルには私からドレスデンでの出来事を話しました。

ホストファミリーと共に過ごす最終日、ハンナの学校見学をしました。朝早くに、ハンナと一緒に出発し、バスで登校しました。化学の授業を受け、それから学校の農場で山羊や羊などとふれあいました。化学の授業はドイツ語で行われたので完璧に理解することはできませんでしたが、化学式などから想像力を駆使して何について解説しているのかの概要は掴めました。ハンナのクラスメート達と話すことができ、一日目のホームパーティで話したヨハナともまた会えて楽しかったです。

その日はホステルに帰って寝たものの、次の日の午前中に自由時間があったので私は再びハンナと一緒に行動しました。ステファンの職場なのですから是非とも国会議事堂を見学したいと思いました。国会議事堂は有名な観光スポットであり、見学には事前予約が必要ですが、特別にステファンが案内して下さいました。忙しいのにそうまでして私にドイツを見せて下さって有難い事でした。建物の中には興味深い歴史的資料が多く展示されていました。建物そのものも芸術的で、東側部分と西側部分が美しく重ね合わさる形にデザインされていました。ドイツの歴史を暗喩する建物で政治を行うことは、歴史の上に今があるというメッセージなのでしょう。見学できてよかったです。国会議事堂の後にはイーストサイドギャラリーに行きました。この場所はドイツで最も有名な場所ですからハンナと一緒に見に行けてよかったです。長く続く壁に今では様々な絵が描かれています。間近で見ると、大迫力でメッセージが伝わってきました。

このように、ハンナのご一家は　様々な視点からドイツの姿を見るチャンスをたくさんくださいました。感謝してもしきれないほど親切にしていただきました。次回ハンナが日本に来てくれた時には、ハンナたちが私に見せてくれたのと同じくらい様々な日本の顔を紹介して楽しませてあげたいと思っています。そのために今からアイディアを練っています。

全体の感想

初めてのドイツで経験したことひとつひとつが貴重な体験となりましたが、今回の国際交流派遣をまさに充実させたものは「出会い」です。一緒に過ごした人たちが皆、素晴らしい人たちばかりでした。おかげで豊かな時間を過ごすことが出来、幸運だったと思います。

かけがえのない出会いは 3 度起こりました。

もちろん大事な 1 つは、素敵なホストファミリーとの出会いです。優しさに溢れる知的な一家で、初めて対面したとたん私は大好きになりました。一緒に時間を過ごすなかで、立派なドイツ人らしい生き方を垣間見る事が何度もありました。異文化に感動し多くを学びました。このファミリーと過ごした時間は私の人生の宝ものと言えます。

もう 1 つの出会いは、ドイツ人の青少年たちと知り合えたことです。さまざまな家庭環境で育ったドイツの若者と話ができて楽しかったです。地球環境の改善のために今できることから行動を起こしている人がいたり奥深い思考を持って日常を過ごしている人がいたり、私にとっては驚きと気づきのある国際交流でした。みんなの事が大好きで、来年再会するのが待ち遠しくてなりません。帰国後もメールなどをやり取りして仲良くしている人も多いです。

そして、かけがえのない出会いの最後の 1 つは、11 人の魅力ある日本人派遣員と知りあえたことです。鋭敏な判断力の持ち主が結集しているので、すっかり信頼を寄せて安心して一緒に過ごしていました。困ったときには助けてもらったこともありました。この 11 人で滞在できて楽しさが倍増しました。出会いを喜んでいます。

秦悠乃

ホストファミリー

私を受け入れてくれたホストファミリーは、一才年下の高校生の女の子ジリ・メイヤー(Siri　Meyer)、彼女の両親のクリスティン(Christin)とマイケル(Michael)、ジリの弟のルカ(Luca)そして、二匹の猫でした。ジリは気遣いのできる、かわいらしい子でした。彼女の両親もとても優しくて、なにかある度に「必要なものはないか」と気をつかってくれました。

ホームステイ初日の夕方、ゴルミッツから帰ってきた私をジリとクリスティンが車で迎えに来てくれました。そして、ベルリンの町を案内してくれながらマイケルの職場である映画編集スタジオに向かいました。映画の機材について詳しく説明してもらい、映画好きの私にとってとても興味深いものでした。マイケルは日本人では北野武監督の映画の仕事にも関わったことがあるそうです。

その後、ジリの家族みんなと夕食を食べに行きました。ドイツ料理に興味があると事前にやりとりしていたものの、和食が恋しくなり食べたいものを聞かれたときに和食をリクエストし「渋谷区」という日本食レストランに連れていってもらいました。店内一杯に謎の日本語が書かれた独特な雰囲気のレストランで、「sushi pizza」(ピザ生地の上に刺身がのっていてバルサミコがかけられたもの)と「king of king」(アボカドとフライにしたアナゴの巻き寿司でチリソースがかかったもの)を注文しました。どちらも日本にはない日本食でしたが、予想外においしく、食文化が混ざりあった料理が興味深いものでした。アパートに戻った後は、ジリと一緒にドイツのお菓子を食べながらジリのお気に入りの Netflix のドラマである「stranger things」を見ました。

24 日は、遅めに起き、近所のフリーマーケットに連れていってもらいました。食べ物や雑貨を売る小さいお店が出ていて、毎週行われているそうです。ジャムを買って少し休憩した後、私の行きたかったハッケンシャーホーフ(Hackesche Hofe)というお店がたくさん集まった場所とアレクサ(Alexa)というモールにも行きました。家族へのお土産やかわいらしいドイツのお菓子の他に、バーゲン中だったのでハイヒールのかわいい靴を買いました。

夜ご飯は私が巻き寿司を作りました。まきすと海苔、すしのこ(粉末のすし酢)は日本から持ってきましたが他の材料はすべてベルリンで手にはいりました。(スーパーにカニかまがあったのは驚きです！)　米は鍋で調理するしかないので柔らかくなってしまいましたが、まずまずの完成でした。みんなおいしいと言って

食べてくれて本当に嬉しかったです。

25日はベルリンから車で一時間ほどのポツダムにあるサンスーシ宮殿に行きました。私が前から行ってみたかった名所です。フリードリッヒ2世が18世紀に建てさせたロココ式の趣豊かな建物で、室内にも美しい装飾やフリードリッヒ大王が実際に使った家具も置かれていました。写真は見たことがあったのですが、実物は何倍も美しく荘厳な建物でした。お昼にはドイツの伝統料理であるシュニッゼル(子牛のカツレツ)を食べました。ふわふわサクサクでとてもおいしかったのですが、ジリは代わりに魚のピザを食べていました。ジリはペスカタリアン(肉を食べないけど魚を食べる菜食主義)だそうで、環境のためにそうしているそうです。確かにドイツは環境への意識が高い人が多く、3Rや省エネが積極的に行われていました。

ホームステイが終わる 26 日はジリの学校に朝の数時間だけお邪魔しました。数学の授業と国語の授業を受けたのですが、全てドイツ語なので全く分からなかったです。すると隣の女の子が英語の小説を貸してくれました。ゾンビが蔓延された世界で女子高生がサバイバルするという話で、とても面白かったです。ドイツの学校で一番印象に残ったのは制服がなく、校則もほとんどないことです。私の学校の校則を説明したらジリとその友達はとても驚いていました。その後、ジリと別れクリスティンの車で集合場所まで向かい、ホームステイは終わりました。

週末だけの短いホームステイではありましたが、ジリとその家族のおかげで本当に充実した時間を過ごすことができました。みんなドイツについて教えてくれ、日本についても興味を持ってくれました。このホームステイでジリと知り合えて、ドイツについて学べたことは本当に幸運なことだと思います。本当によい経験ができました。

全体の感想

私は、自分の視野を広げるために一度海外に行ってみたくてこのプログラムに応募しました。

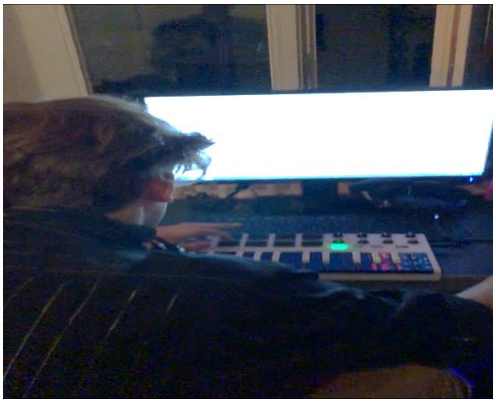
このプログラムでホームステイ先の家族やドイツの青少年と関わるうちに、いろいろな考えがあることを知り、会話の中でお互いに自分の文化を教えあい、聞きあうことで自分が文化の違いから分からないと思っていたことを理解することことができました。そして、自分なりにドイツや日本の歴史、各国の文化の違いとその発展、食文化などを通じた文化の融合、英語、環境問題など様々なことに興味を持つようになりました。この二週間で学んだことは本当にたくさんあって、それは旅行や留学ではなく人々と「交流」をするこのプログラムだからこそ学べたのだと思います。また、プログラムでの観光や食事で、ドイツという国の文化や魅力についても知ることができました。これらを通して、物事を理解する視野が広がったと思います。この派遣に参加することできて本当によかったと思っています。最後にお世話になった新宿区とミッテ区のみなさん、交流したドイツの人たちそしてホストファミリーのみなさん、本当にありがとうございました。

森岳人

ホームステイ

私のホストファミリーは、父であるクリスティアン(Christian)、母であるエレノア(Eleonore)、そしてホストブラザーであるイータン(Ethan)、兄であるマテウス(Mattheus)、妹であるオルガ(Olga)に加えて、留学生であるアレクサンダー(Aleksander、以下アーモス)が滞在している、大家族でした。留学生である彼は、3 歳の頃にエストニアで出会った幼なじみであり、毎年夏になると、ドイツに留学しに来ていました。ホームステイ中は、基本的にイータンとアーモスと共に行動していました。イータンは、16 歳にしてすでに身長 1m 90cm という高さに達しており、初めて会った瞬間からドイツ人の血の強さを感じていました。家に帰ると、そこはマンションの 1 フロアを貸し切っているという超大豪邸であり、話を聞くと、父であるクリスティアンが建築業を営んでおり、その関係で家が大きくなったそうです。

初日は、イータンの家で、ドイツで大流行している音楽ゲームをしました。元バンドマンであるアーモスの協力の元に曲を作り、完成した曲に私の名前をつけてプレゼントしてくれました。予想外のおもてなしを受けて、初めは緊張していた私もすぐに打ち解けることができました。

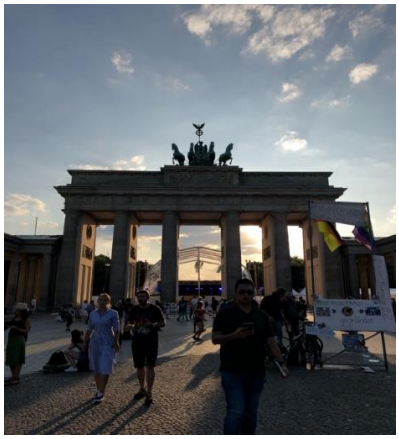


夜は、イータンの父、母、イータン、アーモス、私の五人で手作りのご飯を食べました。しばらくすると、食卓にドリンクとして昆布茶が出てきました。日本の食文化が、こうした遠くの地であるドイツにまで広がっていると知り、なんだが誇らしい気持ちになりました。そこで、日本のお土産として持ってきた掛け軸を渡すと、案の定大喜びをしてもらえることができ、急いで飾る場所を探してくれました。母であるエレノアの驚き方は、今でも忘れられません(笑)。11 時頃になり、そろそろ眠くなってくる頃合いですが、ドイツの少年たちの夜はまだ終わりません。なんと、隣町まで友達とパーティーしに行くと言い出したのです！日本の年齢では、まだお酒を飲むことができないため、残念ながら行くことは出来ませんでしたが、ここですでに日本の子供達との遊び方の違いに、衝撃を受けました。

2 日目は、ドイツ市内の観光に行きました。二人は大のサッカーファンであり、地元ベルリンのチームであるヘルタベルリンのショップに案内され、強制的にチームのタオルを購入させられました。本音を言えば、ドイツのサッカーチームの中で他に好きなチームはあったのですが、後々このタオルを購入したことが、大きな効果を発揮することになります。それに、私自身大のサッカーファンであったため、この買い物をできたことはとても嬉しかったです。

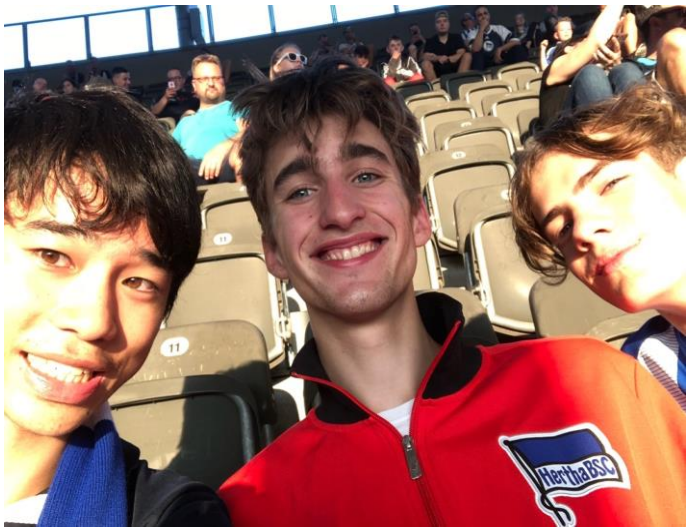
夜になると、ベルリンのブランデンブルク門の前で野外オーケストラを観に行きました。

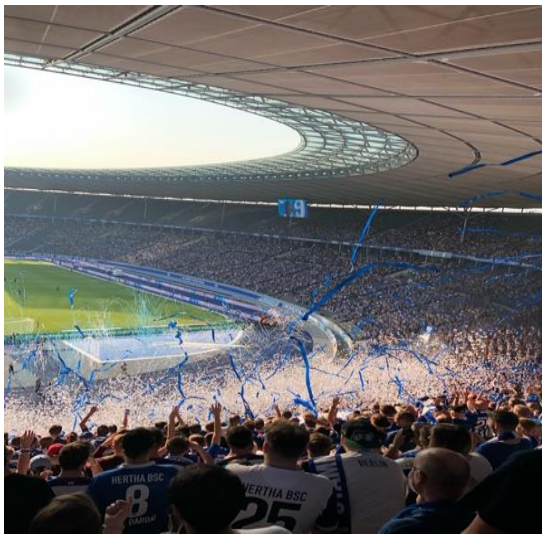
このオーケストラは、今までの一度も野外での公演を行ったことがなく、とても貴重な機会なのだということを、繰り返し聞かされました。恥ずかしながら、私はこの演奏を聴く前まで、クラシックやジャズといった形態の音楽をあまり聞いたことがなく、誘われた当初もあまり乗り気ではありませんでした。しかし、その音楽はホールでの演奏とは違い、野外で力強く響き渡る音楽は、知識の拙い私の心にしっかりと響いてきました。新たな分野のものに触れることができたこの 1 日は、生涯を通して強く残る思い出となりました。



そして迎えた 3 日目の朝、クリスティアンからサプライズを聞かされました。なんと、諦めかけていたサッカーのドイツのチームの試合のチケットを取ってくれていたのです。予想外の発表に、興奮してしまった私たち 3 人は、思わずクリスディアンとハグをしてしまいました。

さらに偶然が重なり、取れたチケットの対戦チームを見てみると、それは地元ヘルタベルリンの試合が行われるものだったのです。これにより、2 日目に買ったヘルタベルリンのタオルを有効活用することが出来たのです。ドイツでサッカーの試合を見ることは、私の旅の中での最大の悲願であったため、無理をしてこの機会を提供してくれたクリスティアンの心の広さにとても感動しました。スタジアムに着くと、そこは日曜日ということもあって超満員であり、サポーターの熱気に包まれていました。響き渡る声援や応援歌、聞こえてくる指笛の音の全てが私を奮い立たせ、すぐにスタジアムの雰囲気に溶け込みました。両チームとも善戦を繰り広げ、惜しくも試合は負けてしまいましたが、日本のサッカーとは全く違う雰囲気の試合を見ることができたこの 1 日は、とても充実したものとなりました。



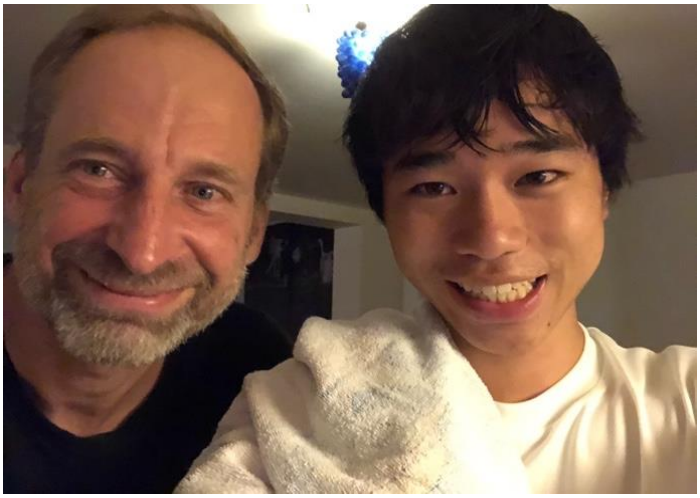


全体の感想

“コミュニケーションの根底にあるもの”

　ホームステイは、自分の人生の中で最も大きな試練の一つでした。初めてのホームステイの１日目、たくさん伝えたいことはあるのに、英語力の無さからそれを共有できない辛さで、初めは苦労しました。同時に、相手も一生懸命話しかけてくれているのに、それに答えられない申し訳なさから、その場から逃げ出したい気持ちでいっぱいでした。

　そんな自分を支えてくれたのは、ホストファザーの存在です。夜、仕事から帰ってきて疲れている中でも、私の拙い英語の１つ１つをしっかりと聞いてくれました。目を見ていると、分かっているよ、伝わっているよ、という気持ちが感じ取れ、自分を受け入れてくれているということが分かり、涙が出そうになるほどうれしかったです。ここで私は、国境を越えたコミュニケーションで大切なことは、相手のことを理解しようとする姿勢を絶やさないことなのだと気がつきました。単純なことかもしれませんが、自分の話を真剣に聞いてくれているのいうことが伝わるだけで、相手もそれに応えてくれます。このことに気づけたことが、この旅における自身の収穫の一つです。この機会に参加することができて、とても幸せでした。



青少年派遣職員回想録

2019 年度 青少年交流を終えて
随行職員　岸田　心

新宿区と当時のティアガルテン区との友好提携が調印されて以来、2019 年度で 12 回目となるミッテ区青少年派遣にご参加いただいた皆さん、そして 12 日間にわたり様々なプログラムでおもてなしいただいたミッテ区の皆さん、素晴らしい機会を創っていただき、本当にありがとうございました。

日本を離れ、長時間のフライトを経てホステルに到着した時は、長旅の疲れもさることながら、「慣れないドイツの地で 12 日間も元気に過ごせるだろうか」、「12 人の仲間とうまくやっていけるだろうか」、「ミッテ区の青少年やホストファミリーの皆さんはどんな方々だろうか」、「自分はドイツの文化や習慣に馴染めるだろうか」…など、様々な不安があっただろうと思います。

しかし、随行させていただいた私の目からは、不安よりも多くを学んで帰りたいというキラキラした眼差しと、「なんとかなる」というたくましい心持ちが勝っているように見え、初日から意義ある交流になりそうだという予感がしたのを今でも覚えています。

青少年の皆さんは、初日の Werk9 でのオリエンテーションを終えて、大きなバスに乗り壮大な街並みを観光したあと、パークインホテルの屋上から眺めた景色を覚えていますか？私は、歴史を感じる圧倒的な建築物に畏敬の念を抱きながらも、美しい夕日を眺めたり一緒にいる人たちの笑顔を見ながら、「つながっている」と実感できた感動を今でも覚えています。

翌日のオリンピックスタジアムでは、本当に貴重なものをたくさん見せていただきました。歴史が感じられるものはもちろんのこと、誇り高い独特の雰囲気がある一方で、私たちを温かく迎え入れてくれる懐の深さを感じたと思います。このような感覚は、歴史博物館や FC Union（サッカークラブ）に伺った際も同様、この交流のすべての日程を通じて一貫して感じられたことでした。

次の日のライザー議員表敬は、皆さんさすがに緊張していましたね。見ているこちらも手に汗握るひとときでしたが、そこはさすがに選ばれた 12 人！自己紹介はもちろんのこと、しっかりと文化や歴史にちなんだ質問や意見を発表することができていました。ライザー議員も、私たちの話を一つ一つ笑顔でしっかり受け止めていただき、真摯にお答えいただいたことに本当に感動しました。あらためて、心より感謝申し上げます。

ミッテ区を離れ、地方のゴルミッツでの体験と交流は、ミッテ区の青少年とグッと距離が近くなったひとときでしたね。そして、ミッテ区に帰ってきたあとは、念願のホストファミリーとの生活が始まりました。さすがに不安そうにこちらを振り向く青少年もいたため、少

し心配にはなりましたが、それぞれ違う家庭で一番記憶に残る経験ができたのではないかと思います。

よく異文化理解と言いますが、私は理解する前に、「違いを認めること」が大変重要であると感じています。違いにこだわるのではなく、それらを認め合うことが大切なのだと。

文化や習慣の違う人同士が互いに相手を知り、相手にこちらの気持ちや考え方を理解してもらうことで、歩み寄りが実感できる体験は、日本人ばかりの中で生活している環境ではなかなか味わえないものです。

一見、簡単なことのように思えますが、自分の気持ちや考え方を正しく、かつストレートに相手に伝えることは、実は慣れていないと難しいものですよね。そもそも自分自身の理解から始めなければならない時もあったのではないかと思います。

そして、お互いの習慣や文化、考え方のギャップを知り、それらがなぜなのかを理解することができたとき、自分自身がそれまでよりスケールの大きい豊かな人間になったような気持ちになったのではないでしょうか。私自身も、ミッテ区で Oliver や Norbert、Anya、コーディネーターの陽子さんを始め、様々な方々とお話をさせていただくことで、自分自身が豊かになっていく実感を得ることができました。

これもひとえに、慣れない随行者を温かく迎え入れ、優しく教えてくださった方々のおかげと心から感謝していますし、新宿区の青少年の皆さんもきっと同じ気持ちだろうと思います。

最終日が近くなった T シャツづくりの日には、すっかりドイツに馴染んで、生き生きとしている青少年の皆さんを見てとても嬉しく思いました。そして、最後の日、感謝の気持ちを伝える「さよならパーティー」は、正直なところ直前まで「大丈夫かな」という不安のほうが強かったのですが、始まってみるとバラエティに富んだ発表の数々に、青少年の皆さんの心意気と感謝の念が伝わってきました。「前の日も睡眠時間を削って準備したんだろうなと思うと感動して一人トイレで涙が…ということもあったような。かなり長時間に及んでしまい、タイムマネジメントに難があったのは事実で、そこは反省しなければなりませんがみんな一生懸命やった結果ですので、どうかお許しいただければと思います。

すべての日程を終え、空港にお見送りに来てくださった方々とハグをしながら、感謝と寂しさが入り混じる感情が抑えきれなかった瞬間が、昨日のことのように思い出されます。

今度は、私たちがミッテ区の青少年の皆さんを受け入れる番です。貴重な体験を持って帰っていただけるよう、力を尽くしたいと思っています。

これからも、この青少年交流が両区の未来の輝きにつながること、そして関係者の皆様すべてのご多幸をお祈りしながら、Danke schön!